前書き

『林園月令』は、江戸時代の漢詩人・書家である館柳湾が編纂した書であるが、国会図書館から「ディジタルコレクション」として公開されている。

http://urx.red/FPwg

このうち、第一編の「七言絶句」について、「捜韻」を使って復元し、原文の訓読文に従って読み下しを行った。「捜韻」と異なる部分があるが、原文を尊重すること、「捜韻」では読み下せない部分がある事に鑑み、原文に従ったが、部分的に不鮮明なところがあり、適宜補った。語釈は、いずれ着けるつもりであるが、多の作業もあり、同様の研究を行っている方のために公開するものである。

人口に膾炙しているものについては、通常の読み下しにしたが、多は原文に忠実に読み下したと思っている。しかし、作業途中の物であるので、間違いもあるかも知れず、参考資料として利用されたい。

２段階に渡って折りたたんであるが、適宜展開して利用されたい。

（２０２１年１１月３日）

読み下し文を見直すと共に、語釈を追加した。

（２０２３年８月２５日）

◆巻一　春

★春郊

水遶冰渠漸有聲
氣融煙塢晩來明
東風好作陽和使
逢草逢花報發生

春郊　唐　錢起

水は氷渠を遶りて漸く声有り
気は煙塢を融して晩来明かなり
東風は好く陽和の使を作し
草に逢い花に逢い生を発するを報ず

【語釈】
○春郊…春の郊外。○冰渠…氷の張った溝。○漸…次第次第に。○煙塢…靄のかかった村落。○晩來…夕方になってから。○東風…春風。○陽和…春天。

★南園

花枝草蔓眼中開
小白長紅越女腮
可憐日暮嫣香落
嫁與春風不用媒

南園　唐　李賀

花枝草蔓眼中に開く
小白長紅越女の腮
憐むべし日暮嫣香落ち
春風に嫁するに媒を用いず

【語釈】
○南園…李賀の故郷、河南省洛陽市宜陽県の南園。○草蔓…草のつる。○越女…越（浙江省）の女。美人が多い。○可憐…感嘆の言葉。ああ。○嫣香…なまめかしい色香。○媒…仲人。
（参考文献）『漢詩大系　１３』

★春日偶題城南韋曲　　春日偶たま城南の韋曲に題す　　唐　羅鄴

韋曲城南錦繡堆　　韋曲　城南　錦繡　堆し
千金不惜買花栽　　千金を惜まず　花を買いて栽ゆ
誰知豪貴多羈束　　誰か知らん　豪貴　羈束多くして
落盡春紅不見來　　春紅を落尽くするも　見来たらず

【語釈】
○韋曲…長安の南にあった地名。○錦繡…錦の刺繍をした織物。○豪貴…極めて三分の高い人。○羈束…拘束。○春紅…春天の花朶。

★春晝偶書　　春昼　偶ゝ書す　　宋　寇準

白晝偶成芳草夢　　白昼　偶ゝ成す　芳草の夢
起來幽興有新詩　　起き来たりて　幽興　新詩有り
風簾不動黃鸝語　　風簾　動かず　黄鸝　語り
坐見庭花日影移　　坐して見る　庭花の　日影の移るを

【語釈】
○幽興…奥ゆかしい興趣。○風簾…窓を覆うカーテン。○黄鸝…コウライウグイス。

★春日

黄金萩萩滿垂楊
尚有春寒到畫堂
酒力漸銷歌扇怯
入簾飛雪帶梅香

春日

宋　秦観

黄金　萩々として　垂楊に満つ
尚お　春寒の　画堂に到る有り
酒力　漸く銷え　歌扇　怯ゆ
簾に入る飛雪　梅香を帯ぶ

【語釈】
○黄金…柳の黄色い芽。○萩萩…やつれたさま。○春寒…春の初めの残寒。○酒力…酒が人を酔わす力。○漸…次第次第に。○歌扇…歌舞の時に用いる扇。

★春日村居

春草門前已沒靴
更無人過野人家
離離細竹時聞雨
淡淡輕烟不隔花

春日村居

宋　崔鶠

春草　門前　已に靴を没す
更に　人の　野人の家に　過ぎる無し
離々たる細竹　時に雨を聞き
淡々たる軽煙　花を隔てず

【語釈】
○野人…官に就かず郊外に住む人。○離離…草木の繁茂しているさま。○淡淡…薄いさま。○輕烟…薄い霞。

★梁園春

暖入金溝細浪添
津橋楊柳緑纖纖
賣花聲動天街遠
幾處春風揭繡簾

梁園の春　　金　元好問

暖は　金溝に入りて　細浪添う
津橋の楊柳　緑　纖々たり
花を売る声　動いて　天街遠し
幾処の春風　繡簾を揭ぐ

【語釈】

○梁園…皇室の庭園。○金溝…宮城の堀。○細浪…さざ波。○津橋…橋梁。○纖纖…か細いさま。○天街…宮城中の道。○繡簾…刺繍をした簾。

★西湖春日壮遊即事

要嘱園丁取折枝
紅桃白李紫薔薇
石函橋畔人煙晚
挑得春光一擔歸

西湖春日壮遊即事　　元　馬臻

園丁に嘱め　折枝を取るを要す
紅桃　白李　紫薔薇
石函橋畔　人煙の晩
春光　一擔を　挑げ得て帰る

【語釈】

○西湖…浙江省杭州市の近くにある風光明媚な湖。○壮遊…大志を抱いて遠くへ旅すること。○即事…事に触れてそのままを詠った詩。○石函橋…石造りのアーチ橋。○人煙…炊事の煙。○春光…春景色。春の気配。○擔…担いだ荷物の単位。○挑…担う。

★春日幽居

淺淺春風尚帶寒
日斜香篆半燒殘
杏花一樹開如錦
怕觸啼鶯不倚闌

春日の幽居

元　馬臻

浅々たる春風　尚お　寒を帯ぶ
日斜めにして　香篆　半ば　焼残す
杏花　一樹　開きて錦の如し
触るるを怕れ　啼鶯　闌に倚らず

【語釈】
○淺淺…そよ風が吹くさま。○香篆…篆書の形をした香。○燒殘…燃え尽きる。○闌…欄干。

★山居吟

元　清珙

滿山筍蕨滿園茶
一樹紅花間白花
大抵四時春最好
就中尤好是山家

山居吟

満山の筍蕨　満園の茶
一樹の紅花　白花に間る
大抵　四時　春　最も好し
就中　尤も好きは　是れ　山家

【語釈】
○筍蕨…タケノコと蕨。○四時…四季。

◆ 正月

★城東早春

詩家清景在新春
綠柳纔黃半未匀
若待上林花似錦
出門俱是看花人

城東の早春

唐　楊巨源（ようきょげん）

詩家の清景は　新春に在り
綠柳　黃　纔（わずか）にして　半ば　未（まだ）だ　匀（ひとし）からず
若（も）し　上林花　錦に似たるを待たば
門を出ずれば　俱（とも）に是（こ）れ　花を看（み）る人ならん

【語釈】
○清景…澄み切った美しい眺め。○嫩…若く柔らか。○色未匀…柳の緑色が浅く、十分色づいていない。○上林…漢の武帝が開いた苑で、転じて天子の御苑。
（参考文献）『和漢名詞選類評釈』

★京中正月七日立春

一二三四五六七
萬木生芽是今日
遠天歸雁拂雲飛
近水遊魚逆冰出

京中（けいちゅう）正月七日立春

唐　羅隱（らいん）

一二三四五六七
万木　芽を生ずるは　是れ　今日（こんにち）
遠天の帰雁（きがん）　雲を払って飛び
近水の遊魚（ゆうぎょ）　氷を　逆（ほとばし）らせて出ず

【語釈】
○歸雁…北方に帰って行く雁。

★早春　唐　來鵬

新暦才將半紙開　新暦 才に 半紙を将て開く
小庭猶聚爆竿灰　小庭 猶お 聚む 爆竿の灰
偏憎楊柳難鈐轄　偏に憎む 楊柳の 鈐轄し難きを
又惹東風意緒來　又 東風の 意緒を惹き来たる

【語釈】
○新暦…新しい暦と年。○爆竿…爆竹。新年に爆竹で邪気を払う習慣があった。○鈐轄…司会、統率。○意緒…心意。情緒。

★元日　唐　成彦雄

戴星先捧祝堯觴　星を戴いて 先ず捧ず 祝 堯の 觴
鏡裏堪驚兩鬢霜　鏡 裏 驚くに堪えたり 両鬢の霜
好是燈前偷失笑　好し是れ 灯前 失笑するを 愉まん
屠蘇應不得先嘗　屠蘇 応に 先ず 嘗むることを得ざるべし

【語釈】
○祝堯觴…理想の皇帝堯を祝う酒の觴。○應…「まさに～すべし」と読み「必ず～しなければならない」の意。

★次韻秦少游元日立春　秦少游の「元日の立春」に次韻す　宋　蘇軾

省事天公厭兩回　事を省く天公　両回を厭い
新年春日併相催　新年　春日　併せて相催す
殷勤更下山陰雪　殷勤にす　更に山陰の雪を下して
要與梅花作伴來　梅花と伴を作し　来らんことを要す

【語釈】
○次韻…同じ韻字を同じ順序で用いて詩を作ること。○秦少游…秦觀。北宋の文人。高郵（江蘇省）の人。蘇軾の弟子、すぐれた抒情詩を多く残した。○元日立春…元日と立春が重なること。○天公…天（の神）。○両回…（元日と立春）の両方にやってくる。

★探春　春を探る　宋　黄庶

雪裏猶能醉落梅　雪裏　猶お能く　梅に酔う
好營杯具待春來　好し　杯具を営め　春の来るを待つ
東風便試新刀尺　東風　便ち　新たに　刀尺を試み
萬葉千花一手裁　万葉　千花　一手に裁す

【語釈】
○雪裏…雪の中。○東風…春風。○刀尺…衣服を製作する。○裁…裁縫で縫い上げる。

★立春　　立春　　宋　方岳

綵燕雙簪翡翠翹　　綵燕の双簪　翡翠の　翹

巧裁銀勝試春韶　　巧に銀勝を裁ちて　春韶を試む

東風已到闌干北　　東風　已に到る　闌干の北

看見嬌黄上柳條　　看見ん　嬌黄の　柳條に上るを

【語釈】

○綵燕…燕の模様の彩り。○雙簪…二つのかんざし。○翹…鳥の尾羽。○銀勝…銀箔を人の形に切って飾りとした髪飾り。○春韶…春を告げる。○東風…春風。○嬌黄…なまめかしい黄色。柳の若芽。

★立春　　立春　　宋　方岳

池痕吹皺緑粼粼　　池痕　吹皺す　緑粼々

才見池痕認得春　　才かに池痕を見て　春を認め得たり

香沁綵鞭旗脚轉　　香は綵鞭に沁みて　旗脚転ず

自題蘭帖記春新　　自ら蘭帖に題して春の新たなるを記す

【語釈】

○池痕…池の波。○吹皺…風に吹かれて波が生じること。○粼粼…水がすきとおって石が見えるさま。○綵鞭…彩られた鞭。○旗脚…旗の足。○蘭帖…彩られた紙。

★山間早春

小桃枝上認年華
隨分紅開一兩花
將謂春風只城市
也吹春色到山家

山間の早春

小桃枝上（しょうとうしじょう）　年華（ねんか）を認むれば
分に従いて　紅は開く　一両花
将（より）て謂（い）えり　春風　只だ　城市と
也（ま）た春色を吹いて　山家に到ると

宋　真山民（しんさんみん）

【語釈】
○小桃…桃の一種で早春に咲く。○年華…春光。○一両花…一二の花。○春色…春景色。

★早春

春風無力柳條斜
新草微分一抹沙
欲向主人借鋤插
掃開殘雪種梅花

早春

春風　力無く　柳條　斜めなり
新草　微（わず）かに分かつ　一抹の沙
主人に向って　鋤插（しょそう）を借り
開きて残雪を掃（はら）いて　梅花を種えんと欲す

明　陳繼儒（ちんけいじゅ）

【語釈】
○鋤插…すき。

◆　二月

★二月二日

唐　白居易（はくきょい）

二月二日新雨晴
草芽菜甲一時生
輕衫細馬春年少
十字津頭一字行

二月二日　新雨　晴れ
草芽（そうが）　菜甲　一時に生ず
軽衫（けいさん）　細馬　春の年　少（まれ）なり
十字の津頭（つとう）　一字に行く

【語釈】

○菜甲…野菜の最初の葉の芽。○輕衫…軽い衣服。○細馬…小型の馬。

★呉楚歌詞

唐　張籍（ちょうせき）

庭前春鳥啄林聲
紅夾羅襦縫未成
今朝社日停針線
起向朱櫻樹下行

庭前の春鳥　林を啄（ついば）む声
紅夾（こうきょう）　羅襦（らじゅ）　縫うこと未だ成らず
今朝　社日　針線を停め
起きて　朱桜に向かい　樹下を行く

【語釈】

○呉楚歌詞…長江中下流一帯の歌。○紅夾…紅色の裏地付き。○羅襦…絹製の短衣。
○社日…（春の）祭りの日。

★社日

鵝湖山下稲粱肥
豚柵雞棲半掩扉
桑柘影斜春社散
家家扶得醉人歸

社日

鵝湖山下　稲粱肥ゆ
豚柵　雞棲　半ば扉を掩す
桑柘　影　斜めにして春社　散じ
家々　酔人を　扶け得て帰る

唐　張演

【語釈】

○社日…土地神を祀る日。立春後第五の戊の日を春社、立秋後第五の戊の日を秋社という。○鵝湖山…荷湖山ともいう。信州鉛山県、現在の江西省鉛山県にある山。○稲粱肥…晩秋の豊作をいう。粱は穀物。○豚穽…豚を飼っているところ。穽は、穴。豚は坑(あな)で飼われていた。○鷄塒…鶏を飼っているところ。塒は、鳥のねぐら。○桑柘…桑の木。やまぐわ。○影斜…夕暮れをいう語。

（参考文献）　『三体詩』

★南浦

南浦東岡二月時
物華撩我有新詩
含風鴨緑粼粼起
弄日鵝黄裊裊垂

南浦

南浦　東岡　二月の時
物華　我を撩し　新詩有り
風を含む鴨は　緑にして　粼々として起こり
日を弄す鵝黄は　裊々として垂る

宋　王安石

【語釈】

○南浦…南側の水辺。○物華…自然の景物。○粼粼…水がすきとおって石の見えるさま。○鵝黄…芽吹いた柳。○裊裊…ゆらゆらするさま。

★観化

竹笋初生黄犢角
蕨芽已作小兒拳
試尋野菜炊香飯
便是江南二月天

観化

竹笋（ちくい） 初めて生ず 黄犢（こうとく）の角
蕨芽（びが） 已に作す 小兒の拳（けん）
試みに 野菜を尋ねて 香飯を炊けば
便ち 是れ 江南 二月の天

宋 黄庭堅（こうていけん）

【語釈】
○観化…変化を観察する。○竹笋…タケノコ。○黄犢…黄色い子牛。○蕨芽…蕨の芽。
○江南…長江下流の南岸地方。

★社日獨坐

海棠雨後沁臙脂
楊柳風前撚綠絲
香篆結雲深院靜
去年今日燕來時

社日独坐

海棠（かいどう） 雨後 臙脂（えんし）を沁（ひ）たし
楊柳 風前 緑糸を撚（ひね）る
香篆（こうでん） 雲を結びて 深院 静かなり
去年の今日 燕 来たりし時

宋 范成大（ぼんせいだい）

【語釈】
○社日…（春の）祭りの日。○臙脂…化粧や絵に使われる赤色の顔料。○香篆…篆書のように曲がった香の煙。○深院…奥深いところにある中庭。

★花朝　　花朝　　明　王衡

晴煙膏露若為容　　晴煙　膏露　若為にか容ずくらん
躑躅香苞望曉紅　　躑躅の苞香　曉紅を望む
莫怨五更風色惡　　怨む莫かれ五更　風色の悪きを
開花原是落花風　　開花は　原と是れ　落花の風

【語釈】
○花朝…花朝節。旧暦二月十五日。○晴煙…晴れたかすみ。○膏露…甘露。○若為…如何に。どのようにして。○香苞…良い香りのする花苞。○曉紅…朝焼け。○五更…夜明け前。○風色…風の気配。○原…もともと。

★花朝　　花朝　　明　湯顯祖

妬花風雨怖難銷　　花を妬む風雨　涙　銷し難し
偶逐晴光撲蝶遙　　偶〻　晴光を逐いて　蝶を撲すること遙かなり
一半春隨殘夜醉　　一半の春は　残夜の酔いに隨い
卻言明日是花朝　　卻って言う　明日　是れ　花朝なりと

【語釈】
○花朝…花朝節。旧暦二月十五日。○殘夜…夜が尽きようとするとき。

◆巻二　三月

★陌上暮春

青青南陌柳如絲
柳色鶯聲晩日遲
何處最傷遊客思
春風三月落花時

陌上の暮春　唐　武元衡

青々　南陌　柳　糸の如し
柳色　鶯声　日　晩るること遅し
何れの処か　最も遊客の思いを傷ましむ
春風　三月　落花の時

【語釈】

○陌上…道の上。○南陌…南側の道路。○遊客…旅人。

★晩春

草樹知春不久歸
百般紅紫鬬芳菲
楊花榆莢無才思
惟解漫天作雪飛

晩春　唐　韓愈

草樹　春の久しく帰らざるをを知りて
百般の紅紫　芳菲を　鬬しむ
楊花　榆莢　才思無く
惟だ解し　漫天に雪と作りて飛ぶ

【語釈】

○百般…各種各様。○芳菲…花のよい匂い。○楊花…柳絮。○榆莢…ニレの実。○才思…才気と思慮。○解…離ればなれになる。○漫天…満天。空一杯。

★春晩題韋家亭子　春晩　韋家の亭子に題す

唐　杜牧

擁鼻侵襟花草香　鼻を擁し　襟を侵して　花草香し
高臺春去恨茫茫　高台　春　去りて　恨み茫々
蔫紅半落平池晚　蔫紅　半ば落ちて　平池は晩れ
曲渚飄成錦一張　曲渚　飄　えり成す　錦一張

【語釈】

○韋家…不祥。○擁鼻…鼻を蔽う。○茫茫…果てしないさま。○蔫紅…鮮やかな赤色の花。○曲渚…曲がったなぎさ。○錦一張…錦の旗一つ。

★暮春日宴溪亭　暮春の日　溪亭に宴す

唐　成彦雄

寒食尋芳遊不足　寒食　芳を尋ね　遊びて足らず
溪亭還醉綠楊煙　溪亭　還た醉う　緑楊の煙
誰家花落臨流樹　誰が家にか花は落つ　流れに臨む樹
數片殘紅到檻前　数片の残紅　檻前に到る

【語釈】

○溪亭…溪にある亭。○寒食…当時から百五日目。この日と前後の三日間は、火を使わない風習があった。○残紅…散った花。○檻前…欄干の前。

★晚春四首

睡足高簷春日斜
碾聲初破小龍茶
樓邊綠樹飛紅盡
春色牆陰老薺花

晚春四首

宋　張耒

睡(ねむり)　足りて　高簷(こうえん)　春日斜めなり
碾聲(てんせい)　初めて破る　小龍(しょうりゅう)の茶
樓辺の緑樹　飛びて　紅(くれない)　尽き
春色の牆陰(しょういん)　薺花(せいか)老いたり

【語釈】
○高簷…高いノキ。○碾聲…石うすの音。○小龍茶…茶葉を精製して竜の形に丸めた物。○春色…春景色。春の気配。○薺花…ナズナの花。

★春晚

曉風池沼水瀾翻
春盡淮南麥秀寒
院落無人日亭午
柳花如雪滿闌干

春晚

宋　釋道潛(しゃくどうせん)

曉風(ぎょうふう)　池沼(ちしょう)　水瀾(すいらん)　翻(ひるがえ)り
春　尽きて　淮南(わいなん)　麥秀(ばくしゅう)の寒
院落(いんらく)　人無くして　日は亭午(ていご)
柳花(りゅうか)　雪の如く　闌干(らんかん)に満つ

【語釈】
○水瀾…水の波。○淮南…安徽省の中部。○麥秀寒…麦の伸びるころ不意に来る寒さ。○院落…屋敷の中の中庭。○亭午…正午。○柳花…柳絮。

★深春　　宋　王鎡

燕子來時春又休
暖風吹綠上枝頭
繡簾不隔荼蘼月
香影無人自入樓

春を深ぐる

燕子　来たる時　春又休む
暖風　緑を吹いて　枝頭に上る
繡簾　隔たず　荼蘼の月
香影　人無く　自ら　楼に入る

【語釈】
○燕子…家燕。○繡簾…刺繍を施したカーテン。○荼蘼…バラ科の植物。○香影…美しい月の光。

★清明日舟次吳門　　宋　方岳

篷窗恰受夕陽明
楊柳梨花半月程
老去不知寒食近
一篙烟水載春行

清明の日　舟　呉門に次る

篷窓　恰も　夕陽を受けて　明らかなり
楊柳　梨花　半月の程
老　去りて　寒食の近きを知らず
一篙の煙水　春を載せて行く

【語釈】
○清明…清明節、二十四節気の一つ。春分のあと一五日目、新暦の四月五、六日ごろに当たる。○次…宿泊する、留まる（多くは舟）。○呉門…甘粛省甘谷県。○寒食…冬至から一〇五日目。この日と前後の日、三日間は火を使うのを禁じて、火を使わない食事とする習慣があった。○一篙…一棹ほどの深さ。○烟水…靄を含んだ水。

（参考文献）　『和漢名詞選類評釈』

★清明　　清明　　宋　陳與義

街頭女兒雙髻鴉　　街頭の女兒　双髻鴉
隨蜂趁蝶學夭邪　　蜂に従い　蝶を趁いて夭邪を学ぶ
東風也作清明節　　東風　也た　清明節を作して
開遍來禽一樹花　　開遍す　來禽　一樹の花

【語釈】
○清明…清明節、二十四節気の一つ。春分のあと一五日目、新暦の四月五、六日ごろに当たる。○雙髻鴉…髪を左右に分けて角形に結った髪型。あげまき。○夭邪…あやしくよこしまなこと。○東風…春風。○開遍…遍く開く。○來禽…リンゴ。

★到江西省看花次韻　江西省に到りて花を看るに次韻す　　宋　楊基

東湖東畔柳枝長　　東湖の東畔　柳枝長し
滿苑飛花亂夕陽　　苑に満つる　飛花　夕陽を乱す
何處祓除兒女散　　何れの処に　除を払う　兒女散ずるや
過來流水鬱金香　　過ぎ来たる　流水　鬱金香

【語釈】
○次韻…同じ韻字を同じ順序で使って詩を作ること。○湖北省武漢市武昌の東郊にある湖。○飛花…柳絮。○祓除…穢れを祓い除く。○鬱金香…ウコンの香り。

★清明前一日作　清明前一日の作

宋　劉煥（りゅうかん）

小窗新緑著枝輕　小窓の新緑　枝に著いて　軽（かろ）し
寒逐東風陣陣生　寒は　東風を逐（お）いて　陣々（じんじん）として生まる
燕子不來花落盡　燕子（えんし）は来たらず　花は落ちて尽き
一簾疏雨又清明　一簾の疏雨（そう）　又　清明

【語釈】
○清明…清明節、二十四節気の一つ。春分のあと一五日目、新暦の四月五、六日ごろに当たる。○東風…春風。○陣陣…とぎれとぎれに続くさま。○燕子…家燕。○一簾…「ひとさめ」で雨の単位。○疏雨…疎らな雨。

◆ 附録　鶯

★和武相公春暁聞鶯　武相公の「春暁鶯を聞く」に和す　唐　楊巨源（ようきょげん）

語恨飛遅天欲明　語は恨み　飛ぶこと遅く　天　明けんと欲す
殷勤似訴有餘情　殷勤に　訴えるに似て　余情有り
仁風已及芳菲節　仁風　已に及ぶ　芳菲（ほうひ）の節
猶向花溪鳴幾聲　猶お　花溪に向（お）いて　鳴くこと幾声

【語釈】

○武相公…不祥。○仁風…恵みを与える風。○芳菲節…花草の盛んな季節。

★黄鶯　唐　鄭谷（ていこく）

春雲薄薄日輝輝　春雲は薄々（はくはく）　日は輝々（きき）
宮樹煙深隔水飛　宮樹（きゅうじゅ）　煙　深くして　水を隔だてて飛ぶ
應爲能歌繫仙籍　応（まさ）に　能く歌の仙籍（せんせき）に繋（つな）ぐるが為に
麻姑乞與女真衣　麻姑（まこ）　女真（じょしん）の衣（い）を　与（あた）うことを乞うべし

【語釈】

○黄鶯…コウライうぐいす。○薄薄…薄いさま。○輝輝…光輝くさま。○煙…霞。○應…「まさに～すべし」と読み「必ず～しなければならない」の意。○仙籍…仙人世界。○麻姑…神話中の仙女の名。○女真…女道士。

★幽齋偶作

幽院纔容箇小庭
疎篁低短不堪情
春來猶賴鄰僧樹
時引流鶯送好聲

幽齋偶作（ゆうさいぐうさく）

唐　齊己（さいき）

幽院　纔（わずか）に容（い）る　箇（こ）の小庭
疎篁（そこう）　低短　情に堪えず
春来　猶（な）お　鄰僧（りんそう）の樹に頼りて
時に　流鶯の　好声を送るを引く

【語釈】

○幽齋…静かな座敷。○幽院…奥深く静かな庭。○

★晨炊玉田聞鶯觀鷺

宋　楊萬里（ようばんり）

曉寒顧影惜金衣
著意聽時不肯啼
飛入柳陰多去處
數聲只許落花知

晨に玉田を炊き鶯を聞き鷺を觀る

曉寒（ぎょうかん）に　影を　顧（かえりみ）て　金衣を惜しむ
意に著いて　聽く時　肯えて啼かず
飛びて　柳陰多き処に入りて去る
数声　只だ　許す　落花の知るを

【語釈】

○玉田…美田。○金衣…黄色の鳥の羽。○著意…心にとめる。

★黄鶯

柳花如雪滿春城
始聽東風第一聲
夢裏江南舊時路
隔溪烟雨未分明

黄鳥　明　李東陽

柳花 雪の如く 春城に満つ
始めて聽く 東風 第一声
夢裏 江南 旧時の路
溪を隔つる 煙雨に 未だ分明ならず

【語釈】

○黄鶯…コウライうぐいす。○柳花…柳絮。○東風…春風。○夢裏…夢の中。○江南…長江中下流の南岸地帯。○煙雨…霧雨。○分明…はっきりする。

★春盡日聞鶯　明　孫七政

正愁春去對春風
忽聽鶯啼碧樹叢
無數飛花向簾幕
將愁盡入一聲中

春尽くる日 鶯を聞く

正に愁う 春 去りて 春風に対するを
忽ち聽く 鶯の 碧樹の 叢に啼くを
無数の飛花 簾幕に向い
愁いを将って 尽く入る 一声の中

【語釈】

○簾幕…すだれと幕。

◆ 燕

★烏衣巷

朱雀橋邊野草花
烏衣巷口夕陽斜
舊時王謝堂前燕
飛入尋常百姓家

烏衣巷　　唐　劉禹錫

朱雀橋辺　野草の花
烏衣巷口　夕陽　斜めなり
旧時の王謝　堂前の燕
飛んで尋常　百姓の家に入る

【語釈】
○烏衣巷…金陵城（南京）の南側、秦淮区の白鷺洲公園のすぐ西側にある町内の名。○朱雀橋…南京城の南にある秦淮河の上の浮橋の名。○巷口…路地の入り口。○舊時…過ぎ去った昔。○王謝…王導や謝安を出した南朝の名族。○堂前…大きい建物の前。○尋常…普通の。○百姓…庶民。
（参考文献）　『唐詩三百首』

★燕子

不知大廈許栖無
頻已銜泥到座隅
曾與佳人竝頭語
幾回拋却繡工夫

燕子　　唐　秦韜玉

知らず　大廈　栖を許すや無や
頻りに　已に泥を銜えて　座隅に到る
曾て　佳人と　頭を並べて語り
幾回か　拋却す　繡工夫

【語釈】
○燕子…家燕。○大廈…広大な房屋。○座隅…座席の傍。○拋却…拋つ。○繡工夫…刺繍に費やす努力と時間。

★燕

宋　陸游

初見梁間新　　初めて見る　梁間　牖戸の新たなるを
銜泥已復哺雛頻　　泥を銜え　已に復た　雛を哺すること頻りなり
只愁去遠歸來晚　　只だ愁う　去ること遠く　帰来の晩きを
不怕飛低打著人　　怕れず　飛ぶこと低く　人に打著するを

【語釈】

○梁間…梁の間。○牖戸…屋舎。ここでは燕の巣。○打著…ぶつかる。

★燕子辭

明　楊維楨

燕子來時春雨香　　燕子　来る時　春雨　香し
燕子去時秋雨涼　　燕子　去る時　秋雨　涼し
鴛鴦一生不作客　　鴛鴦　一生　客と作らず
夜夜不離雙井塘　　夜々離れず　井塘に双ぶ

【語釈】

○燕子…家燕。○鴛鴦…オシドリ。○客…旅人。○井塘…わき水のある池。

★見燕至

初來如報社前春
好宿茅簷伴客身
莫入江南舊庭院
杏花風雨總無人

燕の至るを見る

明　高啓

初めて来たりて　社前に　春を報ずるが如し
好し　茅簷に宿し　客身に伴うに
入る莫かれ　江南の旧庭院
杏花　風雨　総て人無し

【語釈】
○茅簷…茅吹きののき。○客身…旅人。○江南…長江中下流の南岸地方。○庭院…中庭。

★燕

繡户珠簾有路岐
別時嫌早到嫌遲
主家只解憐毛羽
涴盡雕梁不自知

燕

明　李東陽

繡户　珠簾　路岐に有り
別時は早きを嫌い　到るは遅きを嫌う
主家　只だ　解く毛羽を　憐む
雕梁を涴し尽くせども　自ら知らず

【語釈】
○繡户…彫刻や絵で飾られた立派な家。○珠簾…玉すだれ。○路岐…道筋の別れたところ。○主家…主人の家。○毛羽…ひな鳥。○雕梁…彫刻を施したはり。

★燕

暫逐東風別海涯
去年營壘是誰家
春光浪信江南好
到得江南又落花

燕　明　陳价夫

暫く 東風を逐いて 海涯に別る
去年 塁を営むは 是れ 誰が家ぞ
春光 浪に信す 江南の好きを
江南に到り得たれば 又 落花

【語釈】
○東風…春風。○海涯…海辺。○壘…巣のこと。○春光…春景色。○江南…長江中下流の南岸地方。

★春日小齋

社日方過花正肥
閑庭亦自長苔衣
柴扉暫啓元無事
恐有樑間燕子歸

春日小齋　明　瀋野

社日 方に過ぎて 花 正に肥えたり
閑庭 亦た 自ら苔衣を長ず
柴扉 暫く啓く 元 事無し
恐らくは 樑間に 燕子の帰る有らんことを

【語釈】
○社日…（春の）村祭りの日。○閑庭…閑かな庭。○苔衣…鮮やかな苔。○柴扉…柴で作った粗末な扉。○燕子…家燕。

◆ 蝶

★蝶　唐　李商隠

壽陽公主嫁時妝　寿陽公主 嫁時の 妝
八字宮眉捧額黄　八字の 宮眉 額黄を捧す
見我佯羞頻照影　我を見て 佯り羞じ 頻りに影を照らす
不知身屬冶遊郎　知らず 身は 冶遊郎に属するを

【語釈】
○壽陽公主…南朝の宋の武帝の娘。美人であった。○宮眉…宮中で流行している眉墨の描き方。○額黄…六朝時代の女性がした額に黄色を施す化粧。○照影…鏡の中の像を見る。○冶遊郎…娼婦。

★蝴蝶　唐　徐夤

苒苒雙雙拂畫欄　苒々 双々 画欄を払う
佳人偸眼再三看　佳人 眼を偸み 再三 看る
莫言翼短飛長近　言う莫かれ 翼短くして 飛ぶこと長く近しと
試向花間捉也難　試みに 花間に向いて 捉るも 也た難し

【語釈】
○苒苒…しなやかなさま。○雙雙…つがいのさま。○畫欄…画で飾った欄干。○偸眼…こっそりと見る。

★蝴蝶

唐　徐賁

栩栩無因繫得他
野園荒徑一何多
不聞絲竹誰教舞
應仗流鶯又唱歌

蝴蝶

栩々　他を繫ぎ得るに因し無し
野園の荒径　一えに何ぞ多き
糸竹を聞かず　誰か　舞を教う
応に　流鶯の　又　唱歌するに仗るべし

【語釈】

○栩栩…喜びに満ちた自己満足のさま。○荒徑…荒れた道。○糸竹…管弦。音楽。○應…「まさに～すべし」と読み、「きっと～であるに違いない」の意。○流鶯…木々の間を飛び回るうぐいす。

★春日絶句

宋　陸游

故園蛺蝶最多種
百草長時花亂開
窮巷春風元不到
一雙誰遣過牆來

故園の　蛺蝶　最も　種　多し
百草　長ずる時　花　乱れ開く
窮巷　春風　元　到らず
一双　誰か　牆を過ぎて来たらしむ

【語釈】

○故園…故郷。○窮巷…行き止まりの小さな道。○一双…ひとつがい。

★窓下戯詠

何處輕黄雙小蝶
翩翩與我共徘徊
緑陰芳草佳風月
不是花時也解來

窓下にて戯れに詠ず

何処の軽黄ぞ　双小蝶
翩々　我と共に徘徊す
緑陰　芳草　佳風月
是れ　花の時ならざるも　也た　解く来たる

宋　陸游

【語釈】

○輕黄…淡い黄色。○翩翩…身が気軽に飛ぶさま。

★蝴蝶

春山處處客思家
淡日邨煙酒旆斜
蝴蝶不知人事別
繞牆閒弄紫藤花

蝴蝶

春山　処々　客　家を思う
淡日　村煙　酒旆　斜めなり
蝴蝶は知らず　人事の別れ
牆を繞りて　閑に弄す　紫藤花

宋　戴表元

【語釈】

○客…旅人。○酒旆…酒屋の目印の旗。○紫藤花…藤の花。

★秋蝶

欲歇還休却又飛
芙蓉葉底戀秋暉
自知翅粉渾銷盡
羞近尊前舞女衣

秋蝶

明　劉渙

歇(やめ)んと欲して　還(ま)た休(や)め　却って　又　飛ぶ
芙蓉の葉底(ようてい)　秋暉(しゅうき)を恋う
自(おのずか)ら知る　翅粉(しふん)　渾(すべ)て　銷(しょう)じ尽くすを
羞(は)ず　尊前(そんぜん)　舞女の衣に近ずくを

【語釈】

○芙蓉…蓮。○秋暉…秋の陽光。○翅粉…ツバサの粉。

◆ 蜂

★蜂　　唐　羅隱

不論平地與山尖　　平地と山尖とを　論ぜず
無限風光盡被占　　限り無き風光　尽く占めらる
採得百花成蜜後　　百花を採り得て　蜜　成るの後
爲誰辛苦爲誰甜　　誰が為に辛苦し　誰が為に甜し

【語釈】
○山尖…山頂。○風光…風景。

★蜂　　明　郭登

花花華華競採花　　花々　華々　競いて　花を採り
蜜房收課作生涯　　蜜房に課を收めて生涯を作す
知他有甚經綸處　　知る　他に甚の　経綸の処か有る
也向潮時報兩衙　　也た　潮時に向いて両衙を報ず

【語釈】
○華華…花々。○蜜房…蜜蜂の巣。○課…課税。○經綸…国家を治める意思と才能。○兩衙…二つの役所。

◆ 蛙

★西京道中聞蛙　西京道中にて蛙を聞く

唐　吳融

雨餘林外夕煙沈
忽有蛙聲伴客吟
莫怪聞時倍惆悵
稚圭蓬蓽在山陰

雨余の林外　夕煙　沈む
忽ち　蛙声の客吟を伴う　有り
怪む莫かれ　聞く時　倍〻惆悵するを
稚圭が蓬蓽　山陰に在り

【語釈】
○西京道…長安を中心とする地方。○雨餘…雨上がり。○夕煙…夕靄。○客吟…旅人の歌。○惆悵…嘆き悲しむ。○稚圭…孔稚珪。南朝齊の会稽山陰の人。都官尚書に至ったが、文と酒を好み、世事を楽しまなかった。○蓬蓽…貧賤の人の住居。

★池蛙　池蛙

宋　宋祁

越國車前矜勇甚
子陽井底太驕生
來時不羨雲溟樂
口作儀同鼓吹聲

越国の車前　勇に矜ること　甚しく
子陽の井底　太だ生を驕れり
来たる時　羨まず　雲溟の楽
口に作す　儀同　鼓吹の声

【語釈】
○越國…越（蘇州）の国。○子陽…東漢の公孫述。王莽の乱の時、蜀で自立したが光武帝に敗れて死亡した。○雲溟…雲が空を覆って暗いこと。○儀同…元勲者を優待して賜った、職務の無い高官。○鼓吹…演奏楽曲。

◆巻三　夏

★夏晝偶作　夏昼の偶作

唐　柳宗元

南州溽暑醉如酒　南州の溽暑　酔うこと酒の如し
隱几熟眠開北牖　几に隠りて　熟眠　北牖を開く
日午獨覺無餘聲　日午　独り覚むれば　余声無く
山童隔竹敲茶臼　山童　竹を隔てて　茶臼を敲く

【語釈】
○夏晝偶作…夏の昼に、たまたま作った詩。○南州…南国の永州、作者が左遷された先の地。○溽暑…蒸し暑いこと。○隱…よりかかる。○几…机。○北牖…北側の窓。○牖…れんじ窓。○日午…正午。○餘声…ほかの物音。丸う茶臼…茶の葉をひいて抹茶にするのに用いるひき臼。
（参考文献）『三体詩』

★山亭夏日　山亭の夏日

唐　高駢

綠樹陰濃夏日長　緑樹　陰　濃やかにして　夏日し
樓臺倒影入池塘　楼台　影を倒しまにして　池塘に入る
水精簾動微風起　水精の簾　動い　て微風起り
滿架薔薇一院香　満架の薔薇　一院　香し

【語釈】
○山亭…山の別荘。○陰濃…木々の葉が生い茂って暗くなっていること。○池塘…大きな池。○一架…棚一杯の。○薔薇…バラ。○滿院…中庭一杯。
（参考文献）『漢詩鑑賞辞典』

★夏日城中作　夏日城中の作　唐　齊己

竹低莎淺雨濛濛　竹低れ　莎浅く　雨濛々
小檻幽窗暑月中　水檻　幽窓　暑月の中
有境牽懐人不會　境の　懐を牽く人　有るも会せず
東林門外翠横空　東林門外　翠　空に横わる

【語釈】
○莎…はますげ。○濛濛…煙るようにもやっとしているさま。○水檻…水のほとりの手すり。○幽窗…静かな窓。○東林…東辺の林。東林寺を指すこともある。○空…大空。

★夏日西齋書事　夏日の西齋にて事を書す　宋　司馬光

榴花映葉未全開　榴花　葉に映じ　未だ全くは開かず
槐影沉沉雨勢來　槐影　沉々　雨勢来る
小院地偏人不到　小院　地は偏にして　人到らず
滿庭鳥迹印蒼苔　満庭の鳥迹　蒼苔に印す

【語釈】
○西斎…西側の書斎。○即事…事にふれて、その場に応じて詩を作ること。○榴花…ザクロの花。○槐影…エンジュの木の影。○沈沈…草樹の茂っているさま。○雨勢…あまけ。○地偏…市街から離れていること。○鳥迹…鳥の足跡。○蒼苔…青い苔。○印…印を押したように標す。

★夏晝小雨　夏昼の小雨

宋　戴昺

小牀蘄簟展琉璃　小牀蘄簟（きたん）琉璃（るり）を展べ
窗外新篁一尺圍　窓外の新篁（しんこう）一尺団
正午雲橋疎雨過　正午　雲橋　疎雨過ぎ
冬青花上蜜蜂歸　冬青　花上　蜜蜂帰る

【語釈】
○小牀…小型の臥具。○蘄竹を編んで作ったむしろ。○新篁…新しい竹。○雲橋…橋のアーチのような雲。○疎雨…まばらな雨。

★夏日閒坐　夏日閑坐

宋　徐璣

無數山蟬噪夕陽　無数の山蟬　夕陽に噪（さわ）ぐ
高峰影裏坐陰涼　高峰影裏（こうほうえいり）陰涼（いんりょう）に坐ず
石邊偶看清泉滴　石辺（せきへん）偶（たま）たま看る　清泉の滴（したた）るを
風過微聞松葉香　風過ぎて　微（かす）かに聞く　松葉（しょうよう）の香（かおり）

【語釈】
○閒坐…閑かに坐る。○陰涼…物陰で涼しくて爽やかなところ。○聞…臭いをかぐ。

★水軒夏日

碧窗晝寂幽意長
竹陰滿地琴尊涼
輕雷送雨遠不到
雪白水花生晚香

水軒夏日

碧窓　昼　寂として　幽意長し
竹陰　地に満ち　琴尊涼し
軽雷　雨を送り　遠く到らず
雪白く　水花　晩香を生ず

元　馬臻

【語釈】

○水軒…水辺の家屋。○寂…静かでひっそりしたさま。○幽意…物静かな思。○満地…地面一杯。○琴尊…琴と酒樽、文士が悠閑の生活を送る道具。○輕雷…大きくない雷の音。○雪白…雪のように白い。○晩香…寺院で夕方に焚く香のようなかおり。

★己未夏日雑興

中庭日午橘花開
蜂蝶何知故故來
一陣南薰生殿角
亂飄香雪點蒼苔

己未　夏日雑興

中庭　日午　橘花　開く
蜂蝶　何くに知りて　故々に来たる
一陣の南薰　殿角に生じ
飄る香雪　乱れて　蒼苔に点ず

元　善住

【語釈】

○雑興…さまざまな感興。○南薰…南風。○殿角…殿堂の角。○香雪…白色の花。○蒼苔…青い苔。

★夏日　　明　吳寛

緑蔭松蘿暑氣涼　　緑蔭　松蘿　暑気涼し
清泉瀉入小池塘　　清泉　瀉ぎ入る　小池塘
人閑晝永無聊賴　　人　閑に　昼　永くして　聊賴無し
一朶荷花滿院香　　一朶の荷花　満院　香ばし

【語釈】
○松蘿…サルオガセ。○池塘…池。○無聊賴…安んじたことによることがない。○朶…花の付いた枝。○滿院…中庭一杯。

★夏日偶成　　清　黄幼藻

深院塵消散午炎　　深院　塵　消えて　午炎散じ
篆煙如夢晝淹淹　　篆煙　夢の如く　昼　淹々
輕風似與荷花約　　輕風　荷花と約するに似たり
為送香來自捲簾　　為に　香を送り来りて　自ら簾を捲く

【語釈】
○偶成…たまたま作った詩。○深院…奥まった中庭。○午炎…昼の暑さ。○篆煙…篆字のように曲がって立つ香煙。○淹淹…気力のないさま。○荷花…蓮の花。

◆ 四月

★初夏戯題　初夏 戯に題す　唐 徐夤

長養薫風拂曉吹　長養の薫風 曉を払いて吹き
漸開荷芰落薔薇　漸く 荷芰を開きて 薔薇を落とす
青蟲也學莊周夢　青虫 也た 莊周の夢を学びて
化作南園蛺蝶飛　化して 南園の 蛺蝶と作りて飛ぶ

【語釈】
○長養…長大。○薫風…なごやかで暖かい風。○漸…次第次第に。○荷芰…蓮と菱。○莊周夢…「荘子」の故事。夢の中で、蝶になり、夢から覚めたとき、夢の中の自分が現実か、現実のほうが夢なのか分からなくなったという説話。○南園…南の園。

★夏日　夏日　唐 韓偓

庭樹新陰葉未成　庭樹の新陰 葉 未だ成らず
玉階人靜下簾聲　玉階 人 静かにして 簾を下す声
相風不動烏龍睡　相風 動かず 烏龍 睡る
時有幽禽自喚名　時に 幽禽の 自から名を喚ぶ 有り

【語釈】
○新陰…新しい枝葉によってできた木陰。○玉階…玉でできたきざはし。○相風…風向きを観測する機械。○烏龍…犬。○幽禽…姿を見せない鳥。

★初夏

宋　司馬光

首夏清和新雨晴
綠莎細軟不妨行
園夫遮道白何事
梔子花開斑笋生

首夏　清和　新たに　雨　晴る
綠莎　細軟にして　行を妨げず
園夫　道を遮り　何事をか白す
梔子　花開き　斑笋生ずと

【語釈】
○首夏…初夏。旧暦四月。○清和…天気が清明で暖いこと。○綠莎…緑のハマナスゲ。○梔子…クチナシ。○斑笋…まだらだけ。

★初夏即事

宋　王安石

石梁茅屋有彎碕
流水濺濺度兩陂
晴日暖風生麥氣
綠陰幽草勝花時

石梁　茅屋　彎碕　有り
流水　濺々　両陂を度る
晴日　暖風　麦気を生じ
綠陰　幽草　花に勝さる時

【語釈】
○石梁…石橋。○茅屋…茅葺きの家。○彎碕…曲がった岸。○濺濺…水が勢いよく流れるさま。○両陂…両岸の土手。○麥氣…麦の穂を渡る風の香り。麦の伸びる陰暦四月頃の気候。○花時…花が咲き誇る頃。
（参考文献）『漢詩鑑賞辞典』

★早夏

安石榴花猩血鮮
涼荷高葉碧田田
鰣魚入市河豚罷
已是江南打麥天

早夏

宋　陳造

安石　榴花　猩血　鮮かに
涼荷の高葉　碧　田々
鰣魚　市に入りて　河豚　罷む
已に是れ　江南　打麦の天

【語釈】

○安石榴花…石榴の花。○猩血…鮮やかな紅色。○涼荷…涼しげな蓮の葉。○田田…水草の広い葉が水に浮かんでいるさま。○鰣魚…ニシン科の回遊魚。○河豚…フグ。○江南…長江中下流の南岸地方。○打麥…麦を刈り入れて打つ時節。

★小満

子規聲裏雨如煙
潤逼紅綃透客氈
映水黄梅多半老
鄰家蠶熟麥秋天

小満

元　元淮

子規声裏　雨　煙の如し
潤いて　紅綃に逼り　客氈を透す
水に映ずる黄梅　半ば老いたる多し
鄰家　蚕は熟す　麦秋の天

【語釈】

○小満…二十四節気の第8。五月二十一日ころ。○子規…ホトトギス。○煙…靄。○紅綃…赤色の絹織物。○客氈…旅寝の布団。○黄梅…熟して色づいた梅。○麥秋…陰暦四月。

★山居首夏

東風滿意綠週遭
乍著單衣脫敝袍
最愛晚涼新浴罷
坐看春筍過林高

山居首夏

元　李祁

東風　意に満ち　緑　週遭
乍ち　単衣を着て　敝袍を脱す
最も愛す　晩涼　新たに浴し罷みて
坐して看る　春　筍の　林に過ぎて高きを

【語釈】
○首夏…夏の初め、初夏、孟夏。○東風…春風。○週遭…あたり一面。○滿意…意に満ちる。心から満足する。○単衣…ひとえの着物。○敝袍…破れどてら。○春筍…春の筍。

★初夏

黃鸝啼暖隔江村
嫩綠團陰暗小門
昨夜茅簷雷過雨
階前添鸝籜龍孫

初夏

明　錢洪

黄鸝　啼くこと　暖かにして　江村を隔て
嫩緑　団陰　小門に暗し
昨夜　茅簷　雷　雨を過ごす
階前　添う　箇の　籜龍孫

【語釈】
○高鸝…コウライうぐいす。○江村…水辺の村。○嫩緑…新緑。○茅簷…萱葺きのき。○階前…きざはしの前。○籜龍孫…竹。

★四月八日永安禅院期超無　四月八日永安禅院に超無を期す　明　湯顯祖

清朝不見小彌天　清朝　見ず　小弥天
竹塢炊茶過午煙　竹塢　茶を炊き　午に過る煙
解是雨花新浴佛　解す　是れ　雨花　新たに佛に浴するを
諸天誰供洗児錢　諸天　誰か供す　洗児錢

【語釈】

○永安禅院…不祥。○超無…李至清。常州府江陰の人、四方を遊学し、名士と交流があった。○清朝…清らかな夜明け。○彌天…高い志を持つ人。○竹塢…竹で囲まれた家。○雨花…満天の花。釈迦が説法すると満天の花が降り注いだと言う故事。○浴佛…四月八日、釈迦の誕生日に釈迦像を香辛料で洗う習慣。○諸天…天界の仏の守護神。○洗児錢…子供が生まれた時にお祝いに贈られるお金。

★初夏　初夏　明　謝五娘

庭院薫風枕簟清　庭院の薫風　枕簟清し
海榴初發雨初晴　海榴　初めて発らき　雨　初めて晴る
香銷夢斷人無那　香　銷じ　夢　断え　人　那ともする無し
聽得新蟬第一聲　聽き得たり　新蟬の第一声

【語釈】

○庭院…中庭。○薫風…温和な風。○枕簟…枕とたかむしろ。○海榴…ザクロ。

◆ 五月

★夏日宴九華池　夏日に九華池に宴す　唐　陳羽

池上涼臺五月涼　池上の涼台　五月　涼し
百花開盡水芝香　百花　開き尽くし　水芝　香し
黄金買酒邀詩客　黄金　酒を買い　詩客を邀え
醉倒檐前青玉牀　醉倒す　檐前　青玉の牀

【語釈】
○九華池…不祥。○水芝…蓮の花の別名。○醉倒…泥酔して倒す。○檐前…ノキの前。○詩客…詩を共にする客。○青玉…緑色の蓮の葉。

★五月與和叔同遊齊安　五月　和叔と斉安に同遊す　宋　王安石

繰成白雪桑重綠　成して　白雪を繰り　桑　重ねて緑なり
割盡黄雲稻正青　尽く　黄雲を割きて　稲　正に青なり
他日玉堂揮翰手　他日　玉堂　翰を揮う手
芳時同此賦林坰　芳時　同じく　此に　林坰に賦す

【語釈】
○邢恕…和叔。鄭州陽武の人。毀誉褒貶を重ねた。○齊安…広東省江門市恩平市。○白雪…白い花びらのこと。○黄雲…成熟した麦稲の形容。○他日…昔日。○玉堂…宮殿。○揮翰…筆で書を書く。○芳時…花の開く時節。○林坰…郊外の林。

★臨平道中

宋　釋道潜

風蒲獵獵弄輕柔
欲立蜻蜓不自由
五月臨平山下路
藕花無數滿汀洲

臨平道中　宋　釋道潜

風蒲　猟々　軽柔を弄し
立たんと欲する蜻蜓　自由ならず
五月　臨平　山下の路
藕花　無数　汀洲に満つ

【語釈】

○臨平…杭州の江西県にある山の名。○風蒲…風に吹かれる蒲の葉。○獵獵…風の吹く声。○軽柔…軽く柔らかなさま。○蜻蜓…とんぼ。○藕花…蓮の花。○汀洲…なぎさと中州。

（参考文献）『漢詩大系　１６』

★揚州端午呈趙帥

宋　戴復古

榴花角黍鬬時新
今日誰家不酒樽
堪笑江湖阻風客
却隨蒿艾上朱門

揚州の端午に趙帥に呈す

榴花　角黍　時新を鬬わしむ
今日　誰が家か　酒樽あらず
笑うに堪えたり　江湖　風に阻まるる客
却って　蒿艾に隨いて　朱門に上る

【語釈】

○揚州…江蘇省揚州市。○端午…陰暦五月五日の節句。○趙帥…趙という姓の師、不祥。○榴花…ザクロの花。○黍鬬…ちまき。○時新…そのとき新しく出た品、はしり。○蒿艾…よもぎ。○朱門…高位高官のやしき。

★夏直

玉堂睡起苦思茶
別院銅輪碾露芽
紅日轉堦簾影薄
一雙蝴蝶上葵花

夏直

玉堂に睡起し苦に茶を思う
別院の銅輪 露芽を碾す
紅日 堦に転じ 簾影薄く
一双の蝴蝶 葵花に上る

金　趙秉文

【語釈】

○夏直…夏の宿直。○玉堂…宮殿。○睡起…眠りより起きる。○別院…主たる建物で無い建物。○銅輪…銅製の挽き臼。○露芽…茶の名前。○碾…挽いて粉にする。○紅日…赤い太陽の光。○一雙…ひとつがい。

★村居

五月南風化螻蛄
野塘晩筍未成蒲
櫻花落盡紅英細
沙渚鴛鴦半引雛

村居

五月 南風 螻蛄を化し
野塘の晩筍 未だ蒲を成さず
櫻花 落ち尽くして 紅英細く
沙渚の鴛鴦 半ば 雛を引く

金　馬定國

【語釈】

○螻蛄…ニイニイ蝉。○野塘…野原にある池沼。○晩筍…タケノコの一種で地上に出る前に掘り出されるもの。○櫻花…カワヤナギの柳絮。○紅英…紅花。○沙渚…砂の渚。○鴛鴦…オシドリ。

★書吾尹扇　吾尹（ごいん）が扇に書す

明　文徵明（ぶんちょうめい）

溪頭古樹靜垂陰　溪頭（けいとう）の古樹　静かに陰（かげ）を垂れ
溪水盈盈不受塵　溪水（けいすい）　盈々（えいえい）　塵を受けず
五月江南新雨歇　五月　江南　新雨歇（や）みて
晩風多少納涼人　晩風　多少　納涼の人

【語釈】
○吾尹…不祥。○溪頭…渓のほとり。○盈盈…水の満ちているさま。○江南…長江中下流の南岸地方。○多少…多い。

◆巻四　六月

★香山避暑

唐　白居易

六月灘聲如猛雨
香山樓北暢師房
夜深起凭闌干立
満耳潺湲満面涼

六月　灘声　猛雨の如し
香山　楼北　暢師の房
夜　深け　起きて　闌干に凭りて立てば
耳に満つる　潺湲　面に満つる涼

【語釈】
○灘聲…岩にぶつかる早瀬の音。○香山…香山寺。○暢師…香山寺の高僧の一人、文暢禅師をいう。○潺湲…水の流れる音。
（漢詩大系１２）

★香山避暑

唐　白居易

紗巾草履竹疎衣
晩下香山踏翠微
一路涼風十八里
臥乗籃轝睡中歸

紗巾の草履　竹疎の衣
晩に香山を下りて　翠微を踏む
一路　涼風　十八里
臥して　籃轝に乗り　睡中に帰る

【語釈】
○香山…香山寺、洛陽の寺の名。○紗巾…薄絹の頭巾。○竹疎衣…竹の繊維を織って作った衣。晩下…日暮れ。翠微…山の八合目。籃輿…竹を編んで作った籠。
（参考文献）『新釈漢文大系　白氏文集十一』『和漢名詞選類評釈』

★夏雨後題青荷蘭若　夏雨の後 青荷蘭若に題す

唐　施肩吾

僧舎清涼竹樹新　僧舎 清涼にして 竹樹 新たなり
初経一雨洗諸塵　初めて一雨を経て 諸塵を洗う
微風忽起吹蓮葉　微風 忽ち起りて 蓮葉を吹き
青玉盤中瀉水銀　青玉盤中に 水銀を瀉ぐ

【語釈】
○青荷…緑色の蓮の葉。○蘭若…仏教寺院。○青玉盤…碧緑色の蓮の葉の比喩。○水銀…光る露の比喩。

★文殊院避暑

唐　李羣玉

赤日黄埃満世間　赤日黄埃 世間に満つ
松聲入耳即心閑　松声 耳に入りて 即ち 心 閑かなり
願尋五百仙人去　願わくは 五百仙人を尋ねて去りて
一世清涼住雪山　一世 清涼 雪山に住せん

【語釈】
○文殊院…四川省成都市文殊院。○赤日黄埃…俗世間の煩わしさの比喩。○五百仙人…不祥。

★夏日書依上人壁　夏日依上人の壁に書す

南唐　李中

門外塵飛暑氣濃　門外　塵　飛んで　暑気濃し
院中蕭索似山中　院中　蕭索　山中に似たり
最憐煮茗相留處　最も憐れむ　茗を煮て　相留まる処
疎竹當軒一榻風　疎竹　軒に当たる　一榻の風

【語釈】

○依上人…不祥。○院中…僧院の中。○蕭索…もの寂しいさま。○疎竹…まだらな竹林。

★暑中閑詠　暑中閑詠

北宋・蘇舜欽

嘉果浮沈酒半醺　嘉果　浮沈し　酒半ば醺ず
床頭書冊亂紛紛　床頭の書冊　乱れて紛々
北軒涼吹開疎竹　北軒の涼吹　疎竹を開き
卧看青天行白雲　卧して看る　青天　白雲の行くを

【語釈】

○嘉果…美味な果実。○醺…ほろ酔い。○書冊…書籍。○紛紛…混じり、乱れ合うさま。○北軒…北側ののき。○涼吹…涼しい風。○疎竹…疎らに生えた竹。

★六月二十七日望湖樓醉書　六月二十七日望湖楼の酔書

北宋・蘇軾（そしょく）

黑雲翻墨未遮山　黒雲 墨を 翻（ひるがえ）して 未だ 山を 遮（さえぎ）らず
白雨跳珠亂入船　白雨 珠を跳らせて 乱れて船に入る
卷地風來忽吹散　地を卷き 風来たって 忽（たちま）ち吹き散ず
望湖樓下水如天　望湖楼（ぼうころうか）下 水 天の如し

【語釈】
○望湖楼…浙江省杭州市西湖このほとりにあった楼。○醉書…酒に酔った勢いで作った詩。○翻墨…墨をぶちまける。○白雨…夕立の白く見える雨滴。
（参考文献）『漢詩鑑賞辞典』

★村行

金　郭邦彦（かくほうけん）

棗花初落路塵香　棗花（そうか） 初めて落ち 路塵香（ろじんかんば）し
燕掠麻池乍頡頏　燕は 麻池（まち）を掠（かす）めて乍（たちま）ち 頡頏（きっこう）す
一片雲陰遮十頃　一片の雲陰（うんいん） 十頃（じゅっけい）を 遮（さえぎ）り
賣瓜棚下午風涼　売瓜棚下（ばいかほうか） 午風涼し

【語釈】
○麻池…麻の生えた池。○頡頏…鳥が上下するさま。○一片…満天。ひとひら。○雲陰…雲影。

★崇義院雑題

六月門前暑似炊
殿堂深處未曾知
晚涼浴罷思歸去
更為松風佇少時

崇義院の雑題

明　文徵明

六月　門前　暑　炊たるに似たり
殿堂　深き処　未だ曽て知らず
晚涼に浴し罷みて　帰り去さんと思えど
更に　松風の為に　佇むこと　少時

【語釈】
○崇義院…江西省贛州市にあった寺。○晚涼…夕方の涼しさ。○少時…しばしの間。

★暑夜

此夜炎蒸不可當
開門高樹月蒼蒼
天河只在南樓上
不借人間一滴涼

暑夜

明　釋宗泐

此の夜　炎蒸　当るべからず
門を開けば　高樹　月　蒼々
天河は　只だ　南楼の上に在り
借さず　人間に　一滴の涼

【語釈】
○炎蒸…蒸し暑さ。○不可當…耐えられない。敵わない。○蒼蒼…月の青白い色の形容。○天河…天の川。○人間…人間社会。
（参考文献）『和漢名詞選類評釈』

◆ 附録　杜鵑

★泛舟入後溪　舟を泛べ後溪に入る

唐　羊士諤

雨餘芳草淨沙塵　雨余　芳草　沙塵浄し
水綠灘平一帶春　水　緑に　灘　平かにして　一帯の春
唯有啼鵑似留客　唯だ　啼鵑の　客を留るに似たる有り
桃花深處更無人　桃花　深き処　更に　人無し

【語釈】
○後溪…不祥。○雨餘…雨上がり。○灘…早瀬。○啼鵑…鳴くホトトギス。○客…旅人。

★山中　山中

唐　顧況

野人愛向山中宿　野人　山中に向いて　宿するを愛す
況在葛洪丹井西　況や　葛洪丹井の西に　在るをや
庭前有箇長松樹　庭前　箇の　長　松　の樹　有り
夜半子規來上啼　夜半　子規　来たりて　上に啼く

【語釈】
○野人…官に就かず郊外に住む人。○丹井…仙薬の丹を練るときに使う水のある井戸。○葛洪丹井…西晋・東晋時代に練丹術を会得したとされる葛洪が、仙薬の丹を練るときに使った水のある井戸。江蘇省鎮江市にあるとされる。○子規…ホトトギス。

★聞子規

蜀魄千年尚怨誰
聲聲啼血向花枝
滿山明月東風夜
正是愁人不寐時

子規を聞く

唐　羅鄴

蜀魄（しょくこん）　千年　尚お　誰をか怨む
声々　血に啼いて　花枝（かし）に向う
満山　明月　東風の夜
正に　是れ　愁人（しゅうじん）　寐らざる時

【語釈】
○子規…ホトトギス。○蜀魄…ホトトギス。○東風…春風。

★子規

暮春滴血一聲聲
花落年年不忍聽
帶月莫啼江畔樹
酒醒遊子在離亭

子規

唐　李中

暮春　血は滴（したた）る　一声々
花落ち　年々　聽くに忍びず
月を帯びて　江畔　樹に啼く莫かれ
酒　醒さめて　遊子　離亭に在り

【語釈】
○子規…ホトトギス。○遊子…旅人。

★夜聞子規

幽林欲雨氣含凄
春晩端居園徑迷
獨向高齋展衾卧
南山夜夜子規啼

夜 子規を聞く

宋　朱熹

幽林 雨ふらんと欲して 気は凄を含む
春晩 端居 園経迷う
独り 高斎に向いて衾を展じて卧す
南山 夜々 子規啼く

【語釈】
○幽林…奥深く静かな林。○凄…すさまじさ。○端居…家の端に坐ること。○園徑…庭園の道。○高齋…高雅な書斎。○子規…ホトトギス。

★過真陽峽

仰見青天尺許青
無波江水不勝平
只驚白晝山竹裂
杜宇初聞第一聲

真陽峽を過ぐ

宋　楊萬里

仰ぎ見る青天 尺許の青
波無くして 江水 平かなるに勝えず
只だ驚く 白昼 山竹 裂け
杜宇 初めて聞く 第一声

【語釈】
○真陽峽…不祥。○尺許…？○杜宇…ホトトギス。

★郷村四月

緑遍山原白滿川
子規聲裡雨如烟
郷村四月閒人少
纔了蠶桑又插田

郷村の四月

宋　翁巻

緑　山原に遍く　白　川に満つ
子規声裏　雨　煙の如し
郷村　四月　閑人少
纔に　蚕桑を了りて　又　田を插す

【語釈】
○即景…見たままの風景を詠った詩。○子規…ホトトギス。○蠶桑…春の養蚕。○插田…田植え。

★夏日雜興

纖纖碧草與階齊
濃緑陰中杜宇啼
花院晝長聽正好
帶聲飛過粉牆西

夏日雜興

元　善住

纖々たる　碧草　階と斉し
濃緑陰中　杜宇　啼く
花院　昼長く聽きて　正に好し
声を帶びて　飛び過ぐ　粉牆の西

【語釈】
○雜興…さまざまな感興。○纖纖…細いさま。か細いさま。○階…きざはし。○杜宇…ホトトギス。○花院…花木を育成する園。○粉牆…白く塗った塀。

◆ 蟬

★聽蟬　蟬を聽く　唐　趙嘏

噪蟬聲亂日初曛　噪蟬（そうせん）　声乱れて　日　初めて曛（くん）ず
絃管樓中永不聞　絃管（げんかん）樓中　永く聞かず
獨奈愁人數莖髮　独（ひと）り　奈（いか）んせん　愁人　数茎の髪
故園秋隔五湖雲　故園　秋は隔つ　五湖の雲

【語釈】
○噪蟬…うるさい蟬。○絃管…音楽。○奈…どうしよう。反語。○数茎…数本。○故園…故郷。○五湖…太湖（江蘇省南部と浙江省北部の境界にある湖）を中心とする湖。

★蟬　蟬　唐　羅隱（ら いん）

天地工夫一不遺　天地の工夫（くふう）　一も遺（のこ）さず
與君聲調借君緌　君に声調を与え　君に緌（ずい）を借す
風棲露飽今如此　風棲（ふうせい）　露飽（ろほう）　今（かく）　此の如し
應忘當年滓濁時　応に忘るなるべし　当年　滓濁（さいだく）の時

【語釈】
○聲調…音楽の節奏。○緌…蟬の管状の口。○風棲…風の中に住む。○露飽…露に飽きる。○應…「まさに～すべし」と読み「きっと～であるに違いない」の意。○當年…昔年。○滓濁…小さくて卑しい（幼虫）。

★新蟬

寂寂宮槐雨乍晴
高枝微帯夕陽明
臨風忽起悲秋思
獨聽新蟬第一聲

新蟬

宋　寇準

寂々たる　宮槐　雨　乍ち晴れ
高枝　微かに　夕陽を帯びて　明るし
風に臨みて　忽ち起こす　悲秋の思
独り聴く　新蟬の第一声

【語釈】

○寂寂…寂しく静かなさま。○宮槐…槐樹。

★聞蟬

近交紙薄雲翻手
舊夢冠空雪滿顛
却憶畫船曾聽處
夕陽高柳斷橋邊

蟬を聞く

宋　林景熙

近交　紙のごとく薄くして　雲　手を翻えし
旧夢　冠に空しく　雪　顛に満つ
却って憶う　画船　曽て聴きし処
夕陽　高柳　断橋の　辺

【語釈】

○近交…近い者との交わり。○雲翻手…杜甫「貧交行」。○雪滿顛…頭のてっぺんが白髪になる。○画船…絵で飾った船。○斷橋…壊れた橋。

★聽蟬

説露談風有典章
詠秋吟夏入宮商
蟬聲無一**添**煩惱
自是愁人枉斷腸

蝉を聞く

宋　楊萬里（ようばんり）

露に説き　風に談じて　典章（てんしょう）有り
秋に詠じ　夏に吟じて　宮商（きゅうしょう）に入る
蝉声　一つの煩悩（ぼんのう）を　添える無し
自（おの）ずから是れ　愁人　枉（ま）げて断腸

【語釈】

○典章…法則。○宮商…音律。○枉…ことさらに。

★風柳鳴蟬

輕明雙翼曉風前
一曲哀箏續斷絃
移向別枝誰畫得
只留殘響客愁邊

風柳鳴蝉（ふうりゅうめいせん）

金　元好問（げんこうもん）

軽明の双翼（そうよく）　暁風（ぎょうふう）の前
一曲の哀箏（あいそう）　断絃を続く
移りて　別枝に向（お）いて　誰か　画き得ん
只だ　残響を留む　客愁（かくしゅう）の辺

【語釈】

○輕明…薄くて透明。○哀箏…哀れで妙なる琴の音。○斷絃…音が切れて途絶えること。○客愁…旅の愁。

★聞蟬　蝉を聞く

元　馬臻

短翼含風薄似秋
一聲聲帯夕陽愁
年年古柳官塘路
催得行人白盡頭

短翼（たんよく）　風を含み　薄きこと　秋に似たり
一声　声は　夕陽（せきよう）を帯びて　愁う
年々　古柳　官塘（かんとう）の路
行人（こうじん）を　催（うなが）し得て　頭（こうべ）を白尽（はくじん）す

【語釈】

○年年…毎年。○官塘…公共の堤。○行人…旅人。○白盡…真っ白にする。

◆ 螢

★螢　唐羅鄴

水殿清風玉戸開　水殿の清風　玉戸を開けば
飛光千點去還來　飛光　千点　去りて　還た　来たる
無風無月長門夜　無風　無月　長門の夜
偏到階前點綠苔　偏えに　階前に到りて　緑苔に点ず

【語釈】
○水殿…水に臨んだ殿堂。○玉戸…玉で飾った戸。○長門…長門宮。漢の武帝の寵愛を失った陳皇后が住んだ宮殿。○階前…きざはしの前。

★螢　唐羅鄴

裴回無燭冷無煙　裴回　燭　無く　冷たく　煙　無し
秋逕莎庭入夜天　秋径　莎庭　夜天に入る
休向書窗來照字　書窓に向って　来たりて　字を照らすを休めよ
近來紅蠟滿歌筵　近来　紅蠟　歌筵に満つ

【語釈】
○裴回…徘徊。彷徨。○秋逕…秋の道。○莎庭…ハマナスゲの咲いた庭。○書窗…書斎。○近来…近ごろ。○紅蠟…赤い灯。○歌筵…歌を伴った酒宴の席。

★夜齋見螢

拂竹緣莎復點苔
夜窓無月見飛來
舊書亂後多抛却
懶就微光更展開

夜齋 螢を見る

明　高啓

竹を払い 莎に縁じて 復た 苔に点ず
夜窓 月無く 飛び来たるを見る
旧書 乱れて後 多く抛却す
微光に就いて 更に 展開するに懶し

【語釈】
○夜齋…夜の書斎。○莎…ハマナスゲ。○舊書…古い書物。○抛却…ほったらかしにする。○微光…螢の微かな光。○展開…書物を広げる。

★螢

明　郭登

腐朽如何不自量
化形飛起便悠揚
臍間只有些兒火
月下星前少放光

螢

腐朽 如何んぞ 自ら量らざる
形を化し 飛起して 便ち悠揚たり
臍間 只だ 些兒火 有り
月下 星前 少しく光を放つ

【語釈】
○腐朽…腐り朽ちる。○悠揚…遠く遙かなさま。時間の長いさま。○臍間…へそ状になっている物の間。○些兒火…僅かな光。

◆巻五　秋

★秋夕　　唐　竇鞏

護霜雲映月朦朧
烏鵲爭飛井上桐
半夜酒醒人不覺
滿池荷葉動秋風

秋夕　　唐　竇鞏

護霜　雲に映じ　月　朦朧
烏鵲　争い飛ぶ　井上の桐
半夜　酒　醒むれば　人　覚えず
満池の荷葉　秋風に動く

【語釈】
○護霜…方言で露を結ぶこと。○朦朧…おぼろげなさま。○烏鵲…カササギ。○井上…井戸の上。○人不覺…人影がない。○荷葉…蓮の葉。

★秋詞　　唐　劉禹錫

自古逢秋悲寂寥
我言秋日勝春朝
晴空一鶴排雲上
便引詩情到碧霄

秋詞　　唐　劉禹錫

古自り　秋に逢い　寂寥を悲しむ
我は言う　秋日は春朝に勝ると
晴空　一鶴　雲を排して上り
便ち　詩情を引いて　碧霄に到る

【語釈】
○秋思…樂府題。普通は旅情、別離の意を含むが、ここでは、秋についての感想という意味。○自古…昔から。○便…たちまち。○碧霄…青空。
（参考文献）『漢詩鑑賞辞典』

★涼思

唐　吳融

松間小檻接波平
月澹煙沉暑氣清
半夜水禽棲不定
綠荷風動露珠傾

涼思（りょうし）

松間（しょうかん）の小檻（しょうかん）　波に接して平かなり
月　澹（あわ）く　煙　沈んで　暑気清し
半夜　水禽　棲（す）み定まらず
緑荷（りょくか）　風に動いて　露珠（ろじゅ）傾く

【語釈】

○涼思…涼しさの思い。○小檻…小さなおばしま。○煙…水面に立つ靄。○半夜…まよなか。○水禽…水鳥。○棲…ねぐら。○緑荷…緑の蓮の葉。○風動…風で揺れ動く。○露珠…露の玉。

★秋江寫望

宋　林逋

蒼茫沙嘴鷺鷥眠
片水無痕浸碧天
最愛蘆花經雨後
一篷烟火飯魚**船**

秋江寫望（しゅうこうしゃぼう）

蒼茫（そうぼう）たる　沙嘴（さかく）　鷺鷥（ろし）眠る
片水（へんすい）　痕無く　碧天を浸（ひた）す
最も愛す　蘆花　雨を経（へ）たる後
一篷（いっぽう）の煙火　魚船に飯するを

【語釈】

○寫望…眺めた光景を詠った詩。○蒼茫…青々として広いさま。○嘴鷺…砂洲の突き出た角。○鷺鷥…シラサギ。○片水…水たまり。○一篷…一つの舟の窓。○烟火…炊飯の煙。

（参考文献）『漢詩大系　１６』

★禾熟

百里西風禾黍香
鳴泉落竇穀登場
老牛粗了耕耘債
齧草坡頭臥夕陽

禾熟す　宋　孔平仲

百里の西風　禾黍　香ばし
鳴泉　竇より落ちて　穀　場に登る
老牛　粗ぼ　了す　耕耘の債
草を齧み　坡頭　夕陽に臥す

【語釈】

○禾…稲。○西風…秋風。○禾黍…稲とキビ。○場…脱穀場。○耕耘債…田を耕す仕事のノルマ。○坡頭…丘の上。

（参考文献）『宋詩選注』（東洋文庫）

★秋日田家

淘漉溝源築野塘
滿坡烟草臥牛羊
今年且喜輸官辦
豆莢繁多粟穂長

秋日の田家　宋　文同

漉溝源を淘い　野塘を築く
滿坡の煙草　牛羊　臥す
今年　且つ喜ぶ　官に弁するを　輸するを
豆莢　繁ること多く　粟穂　長し

【語釈】

○淘漉…浚渫。○野塘…野原の池。○滿坡…丘に滿ちる。○煙草…靄に包まれた草。○輸官…政府に納める。○豆莢…豆のさや。

★秋日西湖

飛來雙鷺落寒汀
秋水無痕玉鏡清
疏蓼黄蘆宜掩映
沙邊危立太分明

秋日の西湖

宋　釋道潛

飛来たる双鷺　寒汀に落ち
秋水　痕無く　玉　鏡　清し
疏　蓼　黄蘆　掩映に宜し
沙辺に危立し　太だ　分明

【語釈】

○雙鷺…つがいのサギ。○寒汀…寒々とした渚。○玉鏡…珠の鏡のような水面。○疏蓼…疎らなタデ。○黄蘆…枯れて黄ばんだアシ。○掩映…覆いかくす。○危立…すっきりと立つ。○分明…はっきりとしている。

★秋日西湖

西風夜半捲庭槐
臥聽鄰翁曉圃開
稚子相呼入林去
應知病果落莓苔

秋日の西湖

宋　釋道潛

西風　夜半　庭槐を捲く
臥して聽く　鄰翁の　曉に圃を開くを
稚子　相呼びて　林に入りて去る
応に　病果の　莓苔に落ちるを　知るなるべし

【語釈】

○西湖…浙江省杭州市の近くにある風光明媚な湖。○西風…秋風。○稚子…幼児。○應…「まさに～すべし」と読み「きっと～に違いない」の意。○病果…病気にかかった果実。○莓苔…青苔。

★田間秋日

禾穂纍纍豆角稠
崧前村落太平秋
熙熙多少豐年意
都在農家社案頭

田間の秋日

禾穂は纍々 豆角は稠し
崧前の村落 太平の秋
熙々 多少 豊年の意
都て農家 社案の頭に在り

金 趙元

【語釈】

○禾穂…稲穂。○纍纍…重なり続くさま。○豆角…豆の実。○崧前…大きくて高い山の前。○熙熙…やわらぎ楽しむさま。○多少…多い。○社案…土地の神の神社。

★代呻吟絶句

蘆花方褥竹方床
葛帳含風薤簟涼
夜半起來山月白
滿天清露灑衣裳

呻吟に代わる 絶句

蘆花の方褥 竹の方床
葛帳 風を含み 薤簟涼し
夜半 起来すれば 山月白し
満天の清露 衣裳に灑ぐ

元 吴景奎

【語釈】

○方褥…四角なしとね。○竹方床…竹で出来た寝台。○葛帳…葛布のとばり。○薤簟…にらで作ったむしろ。

★秋行

野菜香粳樂晩年
疎林晴日好秋天
風瓢滿耳鳴琴筑
黄葉深窩得晏眠

秋行（しゅうこう）

明　顧源（こげん）

野菜　香粳（こうこう）　晩年を楽しむ
疎林　晴日　好秋の天
風瓢（ふうひょう）　耳に満ち　琴筑（きんちく）鳴る
黄葉の深窩（しんか）　晏眠（あんみん）を得たり

【語釈】

○香粳…ジャスミン米。○風瓢…瓢箪の形をした風鈴。○琴筑…琴と筑（竹の棒で叩いて音を出す琴に似た楽器）。○深窩…奥深いところにあるすみか。○晏眠…安眠。

◆ 七月

★初秋

不覺初秋夜漸長
清風習習重淒涼
炎炎暑退茅齋靜
堦下叢莎有露光

初秋

唐　孟浩然

覚えず　初秋　夜　漸く長きを
清風　習々　淒涼を重す
炎々たる暑　退き　茅斎静かなり
堦下の叢莎　露光　有り

【語釈】

○漸…次第次第に。○習習…風がそよそよと吹くさま。○淒涼…うら寂しいこと。○炎炎…非常に暑いさま。○茅齋…茅葺きの書斎。○堦下…きざはしの下。○叢莎…ハマナスゲの草むら。

★七夕

今日雲軿渡鵲橋
應非脈脈與迢迢
家人競喜開妝鏡
月下穿針拜九霄

七夕

唐　權德輿

今日　雲軿　鵲　橋を渡る
応に　脈々と迢々とに　非らざるべし
家人　競喜して　妝鏡を開き
月下に　針を穿ちて　九霄を拝す

【語釈】

○雲軿…神仙（ここでは織女）が乗る雲でできた車。○鵲橋…カササギが天の川に架ける橋。○脈脈…続いて絶えないさま。○迢迢…遙かに遠いさま。○妝鏡…化粧に用いる鏡。○九霄…高天。

★到秋

扇風淅瀝簟流灘
萬里南雲滯所思
守到清秋還寂莫
葉丹苔碧閉門時

秋に到る

唐　李商隱

扇風（せんぷう） 淅瀝（せきれき）として 簟流（てんりゅう）灘（したた）り
万里の南雲 所思を 滯（とどこお）らす
守りて 清秋に到れば 還（ま）た 寂莫
葉は丹（あか）く 苔は 碧（みどり）なり 門を閉じる時

【語釈】
○扇風…扇を振ることで起こる風。○淅瀝…哀れに寂しい。○簟流…？○所思…思うこと。○寂莫…ひっそりとしてもの寂しいさま。

★秋登涔陽城

穿針樓上閉秋煙
織女佳期又隔年
斜漢夜深吹不落
一條銀浪挂秋天

秋 涔陽城（しんようじょう）に登る

唐　李羣玉（りぐんぎょく）

穿針楼上（せんしんろうじょう） 秋煙 閉じ
織女の佳期 又 年を隔つ
斜漢 夜深く 吹けども落ちず
一條の銀浪 秋天に挂（か）かる

【語釈】
○穿針樓…漢の時代から七夕の前日に宮女が七孔針を刺すという習慣があり、南朝齊の武帝がこの習慣にちなんで建てた楼閣。○秋煙…終日の煙霞。○織女…織り姫。○佳期…牽牛と会う良い日。○斜漢…斜めに懸かる銀河。○銀浪…白く光る波。

★七夕

年年七夕渡瑤軒
誰道秋期有涙痕
自是人間一週歳
何妨天上只黄昏

七夕

唐　崔塗

年々　七夕　瑤軒　度る
誰か道う　秋期　涙痕有りと
是れ自り　人間の一週歳
何ぞ妨げん　天上　只だ　黄昏なるを

【語釈】

○瑤軒…仙人（ここでは織女）が乗る車。○秋期…七夕。○人間…人間世界。○一週歳…一年。○黄昏…たそがれ。

★題南禅院壁

秋林落葉已斑斑
秋日當庭尚掩關
掃榻晝眠聽鳥語
可憐身世此時閒

南禅院の壁に題す

宋　張耒

秋林　落葉して　已に斑々
秋日　庭に当たりて　尚お　関を掩う
榻を掃いて　昼眠し　鳥語を聴く
憐むべし　身世　此の時の閑

【語釈】

○南禅院…不祥。○斑斑…点々とあるさま。○掩關…門を閉ざす。○榻…寝台。○可憐…感嘆の言葉。ああ。○身世…一生。

★七夕口占

三秋靈匹此宵期
萬古傳聞果是非
免俗未能還自笑
金針乞得巧絲歸

七夕の口占（しちせきこうせん）

三秋（さんしゅう） 霊匹（れいひつ） 此宵（このよい）を期す
万古 伝え聞く 果（はた）して 是（ぜ）か非か
俗を 免（まぬが）るること 未だ能（あた）わず 還（かえ）って 自（みずか）ら笑う
金針（きんしん）に 巧糸（こうし）を乞い得て帰る

宋　朱淑真（しゅしゅくしん）

【語釈】

○口占…紙に書かずに作った即興の詩。○三秋…秋の三ヶ月。○靈匹…神霊の配偶。牽牛と織女。○万古…大昔より。○巧絲…針仕事の巧みなこと。

★初秋夜涼

小蟲機杼月西廂
風雨纔分半枕涼
白髪自疎河漢夢
一瓶秋水玉簪香

初秋夜涼

小虫は機杼（きちょ）にして 月は西廂（せいじょう）
風雨 纔（わずか）かに分つ 半枕（はんりん）の涼
白髪 自（おのずか）ら 疎にして 河漢の夢
一瓶の秋水 玉簪（ぎょくしんかんば） 香し

金　劉仲尹（りゅうちゅういん）

【語釈】

○機杼…機織り機。○西廂…西のひさし。○分…分け与える。○半枕…枕半分。○河漢…銀河。○玉簪…玉簪花。ギボウシ。

★早秋

昨朝一葉見秋生
今日千巖萬壑清
欲借西風蘇病骨
暫來石上聽松聲

早秋

元　劉因

昨朝　一葉　秋の生ずるを見る
今日　千巖　万壑清し
西風を借りて　病骨を　蘇　えらせんと欲し
暫く　石上に来たりて　松声を聴く

【語釈】
○千巖萬壑…多くの山々。○西風…秋風。○病骨…病気の身。

★初秋夜坐

夜深庭院寂無聲
明月流空萬影横
坐對荷花兩三朶
紅衣落盡秋風生

初秋の夜坐

元　趙雍

夜深くして　庭院　寂として声無し
明月　空に流れ　万影　横わる
荷花に対して坐す　両三朶
紅衣　落ち尽くして　秋風生ず

【語釈】
○庭院…中庭。○荷花…蓮の花。○兩三朶…二三の花の付いた枝。○紅衣…蓮の花の花弁。

★初秋夜坐　　元　趙雍

月明如水侵衣溼
臺榭沈沈秋夜長
坐久高僧禪語罷
澹然相對玉簪香

月明　水の如く　衣を侵して　溼う
台榭　沈々　秋夜長し
坐　久しくして　高僧　禅語罷み
澹然　相対して　玉簪　香し

【語釈】

○臺榭…楼台等の建物。○沈沈…夜が更けてゆくさま。○澹然…静かで安らかなさま。○玉簪…玉簪花。ギボウシ。

★秋景　　明　宣宗

新秋涼露濕荷叢
不斷清香逐曉風
滿目濃華春意在
晩霞澄錦照芙蓉

新秋の　涼露　荷叢を　湿し
断えざる清香　暁風を逐う
満目の濃華　春意在り
晩霞　澄錦　芙蓉を照らす

【語釈】

○涼露…冷たい露。○荷叢…一面の蓮の葉。○濃華…盛んに茂っている綺麗な花朶。○春意…春ののどかな心持ち。○晩霞…夕映え。○澄錦…？

★新秋示盛伯宣

暑退新涼透碧紗
砧聲不斷是誰家
酒醒小立殘陽裏
閑數籬邊紫豆花

新秋 盛伯宣に示す

明　劉泰

暑 退きて新涼 碧紗に透る
砧声 絶えざるは 是れ 誰が家ぞ
酒 醒め 小立す 残陽の裏
閑に数う 籬辺 紫豆花

★秋日雑興

紫蔓青藤各一叢
野人籬落管西風
郊扉遠絶誰能到
秋日蟲鳴豆葉中

秋日雑興

明　何景明

紫蔓 青藤 各〻一叢
野人の籬落 西風を管す
郊扉 遠絶し 誰か能く到らん
秋日 虫は鳴く 豆葉の中

【語釈】

○紫蔓…紫色のつる草。○青藤…青い藤の花。○野人…官に就かないで郊外に住む人。○籬落…垣根。○西風…秋風。○郊扉…郊外の住宅。○遠絶…遠く離れる。

◆巻六　八月

★和元郎中従八月十一至十五夜翫月五首　唐　王建

元郎中が八月十一従り十五夜に至り月を翫ぶに和す　五首

半秋初入中旬夜　半秋　初めて　中旬に入る夜
已向堦前守月明　已に堦前に向いて　月明を守る
従未圓時看却好　未だ　円ならざる時従り　看て　却って好し
一分分見傍輪生　一分　分に見る　輪に傍いて生ずるを

【語釈】
○元郎中…不祥。○翫月…月をめでる。○半秋…旧暦八月。○堦前…きざはしの前。○一分…一部分。○傍輪生…何かを囲むように生じる。

★和元郎中従八月十一至十五夜翫月五首　唐　王建

元郎中が八月十一従り十五夜に至り月を翫ぶに和す　五首

亂雲遮却臺東月　乱雲　遮却す　台東の月
不許教依次第看　許さず　依をして　次第に看せることを
莫爲詩家先見鏡　詩家の為に　先ず　鏡を見ること莫かれ
被他籠與作艱難　他に　籠与せられて　艱難を作さん

【語釈】
○元郎中…不祥。○翫月…月をめでる。○遮却…完全に遮る。○台東…楼台の東。○籠與…？○艱難…困難。

★和元郎中從八月十一至十五夜翫月五首

唐　王建

元郎中が八月十一従り十五夜に至り月を翫ぶに和す　五首

今夜月明勝昨夜　今夜　月明　昨夜に勝る
新添桂樹近東枝　新たに桂樹を添え　東枝に近し
立多地濕舁牀坐　立つこと多く　地は湿り　牀に舁れて坐ず
看過牆西寸寸遲　看過す　墻西に　寸々遅きを

【語釈】
○元郎中…不祥。○翫月…月をめでる。○桂樹…月にあるという桂の木。○看過…見過ごす。○牆西…垣根の西方。○寸寸…少しずつ。

★和元郎中從八月十一至十五夜翫月五首

唐　王建

元郎中が八月十一従り十五夜に至り月を翫ぶに和す　五首

月似圓來色漸凝　月は　円に似来たりて　色漸く凝る
玉盆盛水欲侵稜　玉盆　水を盛りて　稜を侵さんと欲す
夜深盡放家人睡　夜　深くして　尽く　家人を放ちて睡る
直到天明不炷燈　直ちに　天明に到りて　灯を炷せず

【語釈】
○元郎中…不祥。○翫月…月をめでる。○漸…次第次第に。○玉盆…玉の盆。付きのこと。○天明…夜明け。○炷燈…灯をともす。

★和元郎中従八月十一至十五夜翫月五首

唐　王建

元郎中が八月十一従り十五夜に至り月を翫ぶに和す

合望月時常望月　合に月を望む時　常に月を望み
分明不得似今年　分明に　今年に似たるを得ず
仰頭五夜風中立　頭を仰げて　五夜　風中に立つ
従未圓時直到圓　円ならざる時従り　直ちに円に到る

【語釈】

○元郎中…不祥。○翫月…月をめでる。○分明…はっきりと。○五夜…五更。夜明け前。

★八月

唐　章孝標

八月

徙倚仙居遶翠樓　徙倚する仙居　翠樓を遶らす
分明宮漏靜兼秋　分明なる宮漏　閑に秋を兼ぬ
長安夜夜家家月　長安　夜々　家々の月
幾處笙歌幾處愁　幾処の笙歌　幾処にか愁う

【語釈】

○徙倚…徘徊する。○仙居…清浄で超俗の住まい。ここでは宮城。○翠樓…緑色の楼閣。○宮漏…宮廷の水時計。

★中秋月

王母粧成鏡未收
倚欄人在水精樓
笙歌莫占清光盡
留與溪翁一釣舟

中秋の月

唐　成彦雄（せいけんゆう）

王母　粧（しょう）　成りて　鏡　未だ収めず
欄（らん）に倚（よ）る　人は在り　水精楼に
笙歌（しょうか）　清光を占め尽くすこと莫かれ
留与（りゅうよ）せよ　溪翁（けいおう）の一釣舟に

【語釈】
○王母…西王母。○水精楼…水晶で飾った楼。○笙歌…吹笙唱歌。○留與…分け与えてやる。

★仲秋八日雲臺觀群花盛開

宋　韓琦（かんき）

仲秋八日　雲台に群花の盛んに開くを観る

春早凡花百種榮　　春早　凡花　百種栄ゆ
秋芳能得幾多名　　秋芳　能く得たり　幾多の名
仙家八月靈葩發　　仙家　八月　霊葩（れいは）　発す
不與尋常俗艶爭　　尋常（じんじょう）　俗艶（ぞくえん）　と争わず

【語釈】
○仲秋…陰暦八月。○雲臺…陝西省華山の雲台峰上にある道觀。○凡花…平凡な花。○秋芳…秋に咲く花。特に菊花。○仙家…仙人の家。雲台のこと。○靈葩…珍奇な花。○俗艶…俗気のある濃艶な色。

★中秋登望海楼　中秋 望海楼に登る　宋 米芾

目窮淮海兩如銀　目 窮わめて 淮海 両つながら 銀の如し
萬道虹光育蚌珍　万道の虹光 蚌珍を育す
天上若無修月戸　天上 若し 修月戸 無くば
桂枝撐損向西輪　桂枝 撐損せん 西に向う輪

【語釈】
○中秋…陰暦八月。○望海楼…不祥。○目窮…見渡す限り。○淮海…淮河（安徽省と江蘇省を流れる川）と海。○虹光…虹の輝き。○蚌珍…珍しいはまぐり。○修月戸…月を修める家。○桂枝…桂の木の枝。○撐損…支えて壊す。○輪…月のこと。

★中秋前偶成　中秋前の偶成　元 虞集

空林月落大如盤　空林 月 落ちて 大なること 盤の如し
雞犬無聲曉氣寒　雞犬 声無く 曉気寒し
童子儗謀朝一食　童子 朝一食を 謀らんと擬し
玉杯盛得露溥溥　玉杯 盛り得たり 露 溥々

【語釈】
○中秋…陰暦八月。○偶成…たまたま作った詩。○空林…人気の無い林。○曉氣…曉の気。○玉杯…杯の美称。○溥溥…露が多いさま。

★山水小景　　山水の小景　　元　吳景奎（ごけいけい）

秋滿西山爽氣多　　秋は 西山に満ち 爽気（そうき）多し
山人帷箔卷煙蘿　　山人の帷箔（いはく） 煙蘿（えんら）を卷く
清溪只在雲林外　　清溪は 只だ 雲林（うんりん）の外に在り
夜半月明聞櫂歌　　夜半 月明 櫂歌（ようか）を聞く

【語釈】
○爽氣…爽やかな空気。○山人…山に隠棲している人。○帷箔…とばりと簾。○煙蘿…靄のこめたツタ。○雲林…隠居の所。○櫂歌…舟歌。

★山中秋夜　　山中の秋夜　　宋　黄庚（こう）

石床彈月鶴聽琴　　石床 月に弾じて 鶴 琴を聽き
玉宇凝秋絶點塵　　玉宇 秋を凝（こ）らして 点塵（てんじん）を絶（ぜつ）す
萬里無雲銀漢淡　　万里 雲無く 銀漢淡し
一天風露溼星辰　　一天の風露 星辰を溼（うるお）す

【語釈】
○石床…坐ったり寝たりするときに使う石製の用具。○彈月…月明かりの下で琴を弾く。○玉宇…佳麗な宮殿。大空。○凝…完全なものにする。形作る。○點塵…小さな埃。○銀漢…天の川。○風露…雨と霧。○星辰…星。

★早雁

涼霜八月塞天寒
飛度衡陽楚水寛
少婦樓頭初掩瑟
一行先向夕陽看

明　高棅

涼霜　八月　塞天　寒し
飛び度る　衡陽　楚水の寛きを
少婦楼頭　初めて瑟を掩い
一行　先ず　夕陽に向かって看る

【語釈】
○塞天…辺塞の地の空。○衡陽…衡山（湖南省衡陽市にある五岳の一つ）の南のこと。衡山の南にある回雁峰は険しい峰で、雁かりがやって来ても、これを越えて南下することはできないと言われる。「衡陽雁断」。○楚水…楚の地方の川。○瑟…大琴。○一行…雁の一つの行列。

★社中

桑林伐鼓酒如川
秋社錢多春社錢
盡道昇平長官好
五風十雨更年年

明　陳獻章

桑林　鼓を伐ち　酒　川の如し
秋社の錢は　春社の錢より多し
尽く道う　昇平　長官好しと
五風　十雨　更に年々

【語釈】
○社中…土地の神の氏子。○桑林…殷の皇帝が伝えたという楽曲の名。○秋社…秋祭り。○春社…春祭り。○昇平…太平の世。○五風十雨…五日ごとに風が吹き、十日ごとに雨が降る。風雨の順調なさま。

★秋日雑興

寒螿啼斷槿園空
萬樹凋傷八月中
只有南山蒼桂在
一株花發向秋風

秋日の雑興

明　何景明

寒螿　啼き断えて　槿園　空し
万樹　凋　傷す　八月の中
只だ　南山の蒼桂の在る有りて
一株　花発いて　秋風に向う

【語釈】

○寒螿…深秋に鳴く虫。○槿園…木槿の園。○凋傷…草木が凋み枯れること。

★秋日雑興六首

柏林楓岸迴宜看
楊柳芙蓉不禁寒
最愛高樓好明月
莫教長笛倚闌干

秋日の雑興

明　何景明

柏林　楓岸　迴かにして　看るに宜ろし
楊柳　芙蓉　寒に禁えず
最も愛す　高楼の好明月
長笛をして　闌干に　倚らしむること莫かれ

【語釈】

○雑興…色々な感興。○柏林…柏の木の林。○楓岸…楓の植えてある岸。○長笛…管楽器。長さ一尺四寸。

◆ 九月

★九日田舎

今日吾家野興偏
東籬黄菊映秋田
浮雲暝鳥飛將盡
始達青山新月前

九日の田舎

唐　錢起

今日　吾が家　野興　偏し
東籬の黄菊　秋田に映ず
浮雲　暝鳥　飛んで　将に尽きんとす
始めて達す　青山　新月の前

【語釈】
○九日…九月九日。○田舎…田舎の家。○野興…自然の景色に対する感興。○東籬…東のまがき。（陶淵明「飲酒其の五」）。

★秋園戯題

傷秋不是惜年華
別憶春風碧玉家
強向衰叢見芳意
茱萸紅實似繁花

秋園　戯に題す

唐　司空曙

秋を傷むは　是れ　年華を惜しむにあらず
別に憶う　春風　碧玉の家
強いて　衰叢に向いて芳意を見る
茱萸　紅実　繁花に似たり

【語釈】
○年華…年月。○碧玉家…緑色の玉のような立派な家。○衰叢…生気の衰えた草叢。○芳意…春意。○茱萸…カジカミ。○繁花…盛んに咲いている花。

★晩秋閑居

地僻門深少送迎
披衣閑坐養幽情
秋庭不掃攜藤杖
閑蹋梧桐黄葉行

晩秋の閑居（かんきょ）

唐　白居易（はくきょい）

地は僻（へき）に　門は深く　送迎　少（まれ）なり
衣を披（ひら）き　閑（しずか）に坐し　幽情を養う
秋庭　掃（はら）わず　藤杖（とうじょう）を携え
閑かに　梧桐（ごとう）　黄葉を蹋みて行く

【語釈】
○閑居…世間との交わりをやめ、煩わされることなく、心静かに住むこと。○地僻…その場所が辺鄙である。○閑坐…静かに坐る。○幽情…心の奥底に潜んでいる気持ち。○藤杖…フジの木で作られたつえ。○梧桐…あおぎり。○黄葉…もみじ葉。
（参考文献）　『新釈漢文大系　白氏文集（三）』

★重陽席上賦白菊

滿園花菊鬱金香
中有孤叢色似霜
還似今朝歌酒席
白頭翁入少年場

重陽席上　白菊を賦す

唐　白居易（はくきょい）

滿園の花菊　鬱金香（うっこんこう）
中に孤叢（こそう）の色　霜に似たる有り
還（ま）た　似たり　今朝（こんちょう）の歌酒の席に
白頭翁は入る　少年の場

【語釈】
○重陽…九月九日。重陽の節句。○鬱金香…ウコンの香り。○孤叢…ぽつんとした叢がり。○今朝…今日。○白頭翁…白髪頭の老人。○少年場…若者の集う所。
（参考文献）　『新釈漢文大系　白氏文集　十』

★宮詞　唐　王涯

銀瓶瀉水向朝妝
燭焰紅高粉壁光
共怪滿衣珠翠冷
黄花瓦上有新霜

宮詞　銀瓶　水を瀉ぎ　朝妝に向う
燭焰　紅高　粉壁の光
共に怪しむ　満衣　珠翠の　冷やかなるを
黄花　瓦上に　新霜有り

【語釈】
○朝妝…朝化粧。○燭焰…灯の炎。○紅高…赤く高いさま。○粉壁…白色の囲い壁。○珠翠…翡翠の珠。○黄花…黄色い菊。

★重九會光化二園　宋　韓琦

誰言秋色不如春
及到重陽景自新
隨分笙歌行樂處
菊花萸子更宜人

重九　光化二園に会す
誰か言う　秋色　春に如かずと
重陽に到るに及びて　景　自ずから新たなり
分に隨いて　笙歌　行楽する処
菊花　萸子　更に人に宜し

【語釈】
○重九…九月九日。重陽の節句。○光化二園…不祥。○秋色…秋景色。○笙歌…音楽と歌。○萸子…須臾。カジカミ。

★白菊

濃露繁霜著似無
幾多光彩照庭除
何須更待螢兼雪
便好叢邊夜讀書

白菊

濃露（のうろ） 繁霜（はんそう） 著（ちょ）の無きに似たり
幾多の光彩 庭除（ていじょ）を照らす
何んぞ須（もちい）ん 更に 螢と雪とを待つを
便ち好し 叢辺（そうへん） 夜 書を読むに

宋 魏野（ぎや）

【語釈】

○濃露…濃い露。○繁霜…厚い霜。○庭除…中庭。○叢邊…草叢のあたり。

★山居吟

半窗斜日冷生光
破衲蒙頭坐竹床
枯葉滿鑪燒焰火
不知屋上有寒霜

山居の吟

半窓の斜日 冷たく光を生ず
破衲（はのう） 頭（こうべ）に蒙（こうむ）り 竹床に坐す
枯葉（こよう） 鑪（ろ）に満ち 焰火（えんか）を焼く
知らず 屋上に 寒霜（かんそう）有るを

元 清珙（せいこう）

【語釈】

○半窗…窓半分。○斜日…夕陽。○破衲…破れた衣。○蒙頭…頭に被る。○焰火…炎を出す火。○寒霜…冷たい霜。

★秋深村況　　明　李開先

農休事簡人多醉
風靜秋深蟲獨喧
城市自然閑客少
過時不見款柴門

秋深村況（しゅうしんそんきょう）

農（や）休み 事 簡（すく）なく 人 多く酔い
風 閑（しずか）に 秋 深（ふか）く 虫 独り 喧（かまびす）し
城市 自然 閑客（かんかくすくな）少し
時を過ぎて見ず 柴門を款（たた）くを

【語釈】

○村況…村の様子。○城市…城郭で囲まれた町。○閑客…暇な旅人。○柴門…柴で作った粗末な門。

★秋深村況　　明　李開先

近交誰復是良朋
一半山人一半僧
落葉滿階風自掃
危樓乘興月同登

秋深村況（しゅうしんそんきょう）

近交（きんこう） 誰か復（ま）た 是れ 良朋（りょうほう）
一半は山人 一半は僧
落葉 階に満ち 風 自（おの）ずから掃（はら）う
危樓 興に乗じて 月 同じく登る

【語釈】

○村況…村の様子。○近交…近くの人との交わり。○良朋…好友。○一半…半分。○山人…山に隠棲している人。○危樓…高楼。

★秋深村況

天氣秋高正泬寥
海風雖急不終朝
幾畦叢菊如雲爛
兩岸蘆花似雪飄

秋深村況

明　李開先

天気　秋高く　正に泬寥
海風　急なりと雖も朝を終えず
幾畦の叢菊　雲の如く　爛たり
両岸の蘆花　雪の飄るに似たり

【語釈】
○村況…村の様子。○泬寥…空の清涼で広いさま。○海風…海から吹く風。○幾畦…多くの畦。○叢菊…叢がって咲く菊。○爛…鮮やかなさま。

★泊長蕩

蒹葭一望暮蒼蒼
長蕩湖頭煙水長
怪道今朝楓葉盡
夜來七十二橋霜

長蕩に泊す

明　朱多炡

蒹葭　一望　暮に蒼々
長蕩湖頭　煙水長し
怪道す今朝　楓葉の尽くるを
夜来　七十二橋の霜

【語釈】
○蒹葭…オギとヨシ。○暮…夕方。○蒼蒼…青々としていること。○長蕩湖…不祥。○煙水…水面に立つもや。○怪道…不思議に思う。○楓葉…楓の葉。○夜来…夜になってから。○七十二橋…多くの橋。

◆ 附録　雁　鴻

★歸雁

瀟湘何事等閑回
水碧沙明兩岸苔
二十五弦彈夜月
不勝清怨却飛來

帰雁

唐　錢起

瀟湘より何事ぞ等閑に回る
水碧に沙明かなり両岸の苔
二十五弦夜月に弾ずれば
清怨に勝えずして却って飛び来たらん

【語釈】

○瀟湘…瀟水と湘水が合流する洞庭湖南の地。○等閑…なおざりにすること。○二十五弦…瑟。大琴。○清怨…美しいもののあわれ。○却飛來…飛び戻る。來は助字で意味が無い。

★夜泊詠棲鴻

可憐霜月暫相依
莫向衡陽趁隊飛
同是江天寒夜客
羽毛單薄稻粱微

夜泊して棲鴻を詠ず

唐　陸龜蒙

憐むべし霜月暫く相依るを
衡陽に向う隊を趁いて飛ぶこと莫かれ
同じく是れ江天寒夜の客
羽毛単薄にして稲粱微なり

【語釈】

○棲鴻…棲み着いているヒシクイ。○可憐…感嘆の言葉。ああ。○霜月…霜の夜の寒い月。○衡陽…湖南省衡陽市。その北側に衡山の南にある回雁峰があり、それを超えることはできないと言われた（衡陽雁断）。○江天…長江と空。○羽毛…皮の衣。○單薄…少なくて薄い。○稲粱…穀物の総称。

★題新鴈

暮天新鴈起汀洲
紅蓼花開水國秋
想得故園今夜月
幾人相憶在江樓

新鴈に題す

唐　杜荀鶴

暮天の新鴈　汀洲より起つ
紅蓼花開く　水国の秋
想い得たり　故園　今夜の月
幾人か　相憶いて　江楼に在る

【語釈】
○汀洲…中洲。○紅蓼…紅色の蓼。○故園…故郷。○江樓…江に臨んだ楼。

★聞雁

接影横空背雪飛
聲聲寒出玉關遲
上陽宮裏三千夢
月冷風清聞過時

雁を聞く

唐　林寛

影を接し　空に横わり　雪を背いて飛ぶ
声々　寒くして　玉関を出ずること　遅し
上陽宮裏　三千の夢
月は冷やかに　風は清し　過ぐるを聞く時

【語釈】
○玉關…玉門関。○上陽宮…唐の高宗が洛陽に建てた宮殿。

★春半聞歸雁

春光深淺没人知
我正南歸雁北歸
頭上一聲如話別
一生長是背人飛

春半ばにして帰雁を聞く

宋　楊萬里（ようばんり）

春光の深浅　人の知る没（な）し
我は　正（まさ）に　南に帰り　雁は　北に帰る
頭上一声　別かれを話（わ）するが如し
一生　長く是れ　人に背（そむ）いて飛ぶ

【語釈】
○春光…春景色。

★四雁圖

江北江南秋正驕
孤飛萬里氣方豪
平生慣有冰霜翼
卻笑東風燕雀高

四雁の図

元　任士林（にんしりん）

江北　江南　秋　正（まさ）に驕（おご）る
孤り万里を飛び　気　方（まさ）に豪なり
平生　氷霜（ひょうそう）の　翼に慣るる有りて
卻（かえ）って笑う　東風に　燕雀（えんじゃく）の高きを

【語釈】
○江北江南…長江中下流の北岸、南岸地方。○平生…常日頃。○東風…春風。○燕雀…燕や雀などの小鳥。

★聞雁

月落江城轉四更
旅魂和夢到灤京
醒來獨背寒燈坐
風送長空雁幾聲

雁を聞く

元　丁鶴年

月落ちて　江城　四更に転ず
旅魂　夢に和して　灤京に到る
醒め来たりて　独り　寒燈に背いて坐す
風は送る　長空　雁幾声

【語釈】

○江城…川辺にある街。○四更…午前一時～三時頃。○旅魂…旅情。○灤京…上都。元のクビライが、モンゴル高原南部に設けた都。○寒燈…寒々とした灯火。○幾聲…多数の声。

★聞鴈寄董莊

晚意秋陰兩不分
渚蘆沙竹護寒雲
鴈聲客裏誰先聽
愁絶惟應我共君

鴈を聞き　董壮に寄す

明　徐賁

晚意　秋陰　両つながら分たず
渚蘆　沙竹　寒雲を護る
鴈声　客裏　誰か先ず聽く
愁絶　惟だ応に　我と君と共となるべし

【語釈】

○董莊…不祥。○晚意…夕方の気配。○秋陰…秋の寒さ。○渚蘆…渚のアシ。○沙竹…砂浜の竹。○客裏…旅の途中。○愁絶…非常に心を痛める。○應…まさに～すべし」と読み「きっと～であるに違いない」の意。

◆ 蟋蟀絡緯　金鐘児紡績娘

★聞蟲　　唐　白居易

暗蟲唧唧夜綿綿
況是秋陰欲雨天
猶恐愁人暫得睡
聲聲移近臥牀前

虫を聞く

暗虫唧々として夜綿々たり
況や是れ秋陰雨ふらんと欲する天なるをや
猶お恐る愁人暫くも睡りを得ることを
聲々移り近ずく臥牀の前

【語釈】
○暗蟲…暗いところで鳴く虫。○唧唧…虫の鳴くさま。チーチー。○綿綿…長く続くさま。○秋陰…秋の曇り。○臥牀…寝床。

★促織　　唐　張喬

念爾無機自有情
迎寒辛苦弄梭聲
椒房金屋何曾識
偏向貧家壁下鳴

促織

念う爾が機無くして自ずから情有るを
寒を迎えて辛苦梭声を弄す
椒房金屋何ぞ曽て識らん
偏に貧家の壁下に向いて鳴く

【語釈】
○促織…コオロギ。○念爾…爾を思う。○無機…自然に任す。○梭…機織り機のヒ。○椒房…后妃の住む部屋。○金屋…華美な部屋。

★山間秋夜　山間の秋夜　宋　真山民

夜色秋光共一闌　夜色（やしょく）秋光（しゅうこう）共に一闌（いちらん）
飽収風露入脾肝　飽くまで風露を収めて脾肝（ひかん）に入る
虚簷立盡梧桐影　虚簷（きょえん）立ち尽くす梧桐（ごとう）の影
絡緯數聲山月寒　絡緯（らくい）数声山月寒し

【語釈】
○夜色…夜の気配。○秋光…秋の月の光。○一闌…一つの欄干。闌は欄に同じ。○風露…秋の風と露。○虚檐…誰もいない軒、縁側。○梧桐…青桐。○絡緯…こおろぎ、くつわむし。
（参考文献）『漢詩鑑賞辞典』

★江邨　江村　明　王汝玉（おうじょぎょく）

汀葦蒼蒼白露凝　汀葦（ていい）蒼々（そうそう）白露凝（こ）る
一灘寒月未收罾　一灘（いちだん）の寒月未だ罾（そう）を収めず
西風吹醒江南夢　西風吹き醒（さ）まず江南の夢
四壁蛩聲半夜燈　四壁の蛩声（きょうせい）半夜の灯

【語釈】
○蒼蒼…盛んに茂るさま。○罾…四つ手あみ。○西風…秋風。○江南…長江下流の南岸地方。○蛩聲…コオロギの声。

★絡緯

元　邨経

牽牛風露滿籬根
淡月疎星夜未分
燈下有人抛錦字
機絲零亂不成文

絡緯（らくい）

牽牛（けんぎゅう）の風露　籬根に満つ
淡月（たんげつ）　疎星（そせい）　夜　未だ分せず
灯下　人有り　錦字を抛うち
機糸（きし）　零乱（れいらん）して　文（ふみ）を成さず

【語釈】

○牽牛…牽牛花。アサガオ。○風露…風と露。○籬根…垣根。○錦字…蘇蕙の回文詩の故事。○機絲…機織り機の糸。○零亂…ゆらゆら動く。

◆巻七　冬　（雪）

★休暇日訪王侍御不遇　休暇の日王侍御を訪ねて遇わず　唐　韋應物

九日驅馳一日閑　九日駆馳して一日閑なり
尋君不遇又空還　君を尋ねて遇わず又空しく還える
怪來詩思清人骨　怪み来たる詩思の人骨を清むるを
門對寒流雪滿山　門は寒流に対し雪は山に満つ

【語釈】
○侍御…皇帝の側に使える人。○驅馳…走り回ること（当時の役人は，9日働き、1日休暇であった）。○怪來…あやしむ（「來」は助辞）。○詩思…詩を作ろうと思う心。○人骨…人。
（参考文献）『三体詩』

★酬王二十舍人雪中見寄　王二十舍人が雪中に寄せらるるに酬ゆ　唐　韓愈

三日柴門擁不開　三日柴門擁して開かず
階平庭滿白皚皚　階平らかに庭に満ち白皚々
今朝蹋作瓊瑤跡　今朝蹋みて瓊瑤の跡を作すは
爲有詩從鳳沼來　詩の鳳沼従り来たる有る為なり

【語釈】
○王二十舍人…王涯。唐の太原の人，司空にまでなったが、甘露の変で殺害された。○柴門…柴で作った粗末な門。○階…きざはし。○皚皚…雪や霜の白いさま。○瓊瑤…美しい珠。ここでは雪のこと。○鳳沼…超俗の地。

★宮詞

五更初起覺風寒
香炷燒來夜已殘
欲卷珠簾驚雪滿
自將紅燭上樓看

宮詞

五更 初めて起きて 風の寒きを覚ゆ
香炷（こうしゅ） 焼き来たれば 夜 已（ざん）に残す
珠簾（しゅれん）を巻かんと欲して 雪の満つるに驚き
自（みずか）ら 紅燭（こうしょく）を将（も）って 楼に上りて看る

唐 王涯（おうがい）

【語釈】
○宮詞…宮中の物事を詠じた詩。○五更…夜明け前。○香炷…香を焚くこと。○殘…尽きようとしているさま。○珠簾…たますだれ。

★霽雪

風卷寒雲暮雪晴
江煙洗盡柳條輕
簷前數片無人埽
又得書窗一夜明

霽雪（せいせつ）

風は寒雲を巻きて 暮雪 晴る
江煙 洗い尽きて 柳条 軽ろし
簷前（えんぜん）の数片 人の埽（はら）う無く
又 書窓 一夜の明（めい）を得たり

唐 戎昱（じゅういく）

【語釈】
○江煙…水の上に立つ靄。○柳条…柳の枝。○簷前…軒の前。

★憶住一師

無事經年別遠公
帝城鐘曉憶西峰
爐煙消盡寒燈晦
童子開門雪滿松

住一師を憶う

唐　李商隱

無事　経年　遠公に別る
帝城　鐘　曉て　西峰を憶う
炉煙　消尽くし　寒燈晦し
童子　門を開けば　雪　松に満つ

【語釈】

○住一師…不祥。○遠公…晉の高僧慧遠。廬山の東林寺に居住した。○帝城…帝都長安。○炉煙…香炉の煙。

★寄鄰莊道侶

聞說經旬不啓關
藥窗誰伴醉開顏
夜來雪壓村前竹
賸見溪南幾尺山

隣荘の道侶に寄す

唐　韓偓

聞説く　経旬　関を啓かずと
薬窓　誰か伴いて　酔いて顔を開く
夜来　雪は圧す　村前の竹
賸し見る　溪南　幾尺の山

【語釈】

○道侶…修行中の同僚。○聞說…聞くところによれば。○經旬…十日余り。○啓關…門を開く。○夜来…夜になってから。○賸見…いたずらに見る。

★雪中偶題

亂飄僧舍茶煙溼
密灑歌樓酒力微
江上晚來堪畫處
漁人披得一蓑歸

雪中の偶題

唐　鄭谷

乱れて僧舍に飄りて　茶煙溼い
密に歌楼に灑ぎて　酒力微かなり
江上　晚来　画くに堪えたる処
漁人　一蓑を披し得て帰る

【語釈】
○僧舍…寺院。○茶煙…茶を煮る煙。○歌樓…歌舞を行う楼。○酒力…酒の人を酔わせる力。○晚來…夕方になってから。

★雪意

向晚浮雲四面平
北風號怒達天明
寒窗一夜清無睡
擬聽杉篁葉上聲

雪意

宋　朱子

晩に向いて　浮雲　四面に平かなり
北風　号怒して　天明に達す
寒窓　一夜　清くして　睡ること無し
聽かんと擬す　杉篁　葉上の声

【語釈】
○北風…冬風。○號怒…怒号。○天明…夜明け。○杉篁…杉と竹。

★雪中

宋　白玉蟾

曉來紅日尚羞明
四外彤雲欲放晴
一夜九天開玉闕
六花萬里散瑤英

雪中

曉来　紅日　尚お明を羞ず
四外の彤雲　晴を放たんと欲す
一夜　九天　玉闕を開き
六花　万里　瑤英を散ず

【語釈】

○曉來…夜明けになってから。○紅日…赤色の光を放つ太陽。○羞明…明るい光に対する恐怖。○四外…四方。○彤雲…紅雲。彩雲。○九天…大空。○玉闕…天帝が住む宮殿の門。○六花…雪。○瑤英…玉に似た美しい石。

★冬日早作

宋　裘萬頃

黄昏月姊翦雲開
夜半雷車載雨來
晨起鈎簾望霄漢
風花吹墮萬瑤瑰

冬日早作

黄昏　月姊　雲を翦りて開き
夜半　雷車　雨を載せて来たる
晨に起き　簾を鈎して　霄漢を望めば
風花　吹き墮とす　万瑤瑰

【語釈】

○黄昏…たそがれ。○月姊…月。月光。○雷車…雷神を載せた車。雷声。○鈎簾…簾を捲き上げて鈎にかける。○霄漢…天空。○萬瑤瑰…多くの玉に似た美しい石。

★雪　　金　高士談

蔌蔌天花落未休　　雪　蔌々たる　天花　未だ落ちて休まず
寒梅疎竹共風流　　寒梅　疎竹　共に風流
江山一色三千里　　江山　一色　三千里
酒力消時正倚樓　　酒力　消える時　正に　楼に倚る

【語釈】
○蔌蔌…花が落ちるさま。○天花…雪。○江山…江と山。○酒力…酒が人を酔わす力。

★雪　　金　呂中孚

隨風拂拂玉花飄　　風に隨いて　払々　玉花　飄る
入夜寒窗更寂寥　　夜に入りて　寒窓　更に寂寥
爐火已殘燈未燼　　炉火　已に残して　灯　未だ燼きず
一簾疎竹白蕭蕭　　一簾の疎竹　白蕭々

【語釈】
○拂拂…散布するさま。○玉花…白い花。ここでは雪。○寂寥…ひっそりとして物寂しいさま。○殘…損なわれる。○燼…燃え尽きる。○一簾…ひとかたまり。○蕭蕭…物寂しいさま。

★題江皋雪霽卷

山川玉潔映朝暉
人世鴻濛果是非
只許詩家占清景
漁蓑偷載一船歸

江皋雪霽の卷に題す

元　蒲道源

山川　玉潔　朝暉に映ず
人世　鴻濛　果に是か非か
只だ許す　詩家の　清景を占むるを
漁蓑　偷　に載せて　一船帰る

【語釈】

○江皋…江岸、江辺。○雪霽…雪が降った後の晴れ。○玉潔…純白で疵の無いさま。○朝暉…朝日。○鴻濛…天地が別れる前のようにカオスの状態。○清景…清らかな景色。○漁蓑…蓑を着た漁師。

★冬暖

冬令偷春多得暖
灞橋無思可吟詩
江梅一樹都開遍
不問南枝與北枝

冬暖

元　胡天游

冬令　春を偷みて　多く暖を得たり
灞橋　思いの　詩を吟ずべき無し
江梅　一樹　都て開遍す
問わず南枝と北枝とを

【語釈】

○冬令…冬を司る神。○灞橋…長安の東の灞上に架かる橋。東に旅立つ人との別れの地。○開遍…遍く開く。

★四景

池頭六出花飛遍
池水無波凍欲平
一望玻璃三百頃
好山西北玉為屏

四景　明　宣宗

池頭の六出　花の飛ぶこと遍し
池水　波無く　凍　平かならんと欲す
一望の玻璃　三百頃
好山　西北　玉を屏と為す

【語釈】
○池頭…池のほとり。○六出…雪。○一望…見渡す限り。○玻璃…水晶に似た宝石。

★宮詞

白雪漫漫積禁隄
夜寒宮月照玻璃
曉來宮女喧看處
掃向盤中捏狻貌

宮詞　明　蜀成王

白雪　漫々　禁隄に積る
夜　寒くして　宮月　玻璃を照らす
曉來　宮女　喧しく看る処
掃いて　盤中に向いて　狻貌を捏す

【語釈】
○漫漫…広く遙かなさま。○禁隄…禁中の堤。○宮月…宮城に臨む月。○玻璃…水晶のような宝石。ここでは雪。○曉來…曉になってから。○狻貌…伝説上の動物。獅子。○捏…ここでは雪で形作ること。

★寒夜

破屋難禁深夜雨
布衾寒湿半床雲
愁来自起推窗看
人比梅花痩幾分

寒夜　明　樊阜

破屋　禁ぎ難し　深夜の雨
布衾　寒に湿う　半床の雲
愁い来たりて　自ら起きて　窓を推して看れば
人は　梅花に比して　痩せること幾分

【語釈】
○破屋…壊れた家。○布衾…布で作った夜具。○幾分…多少。

★雑言

凍雲寒樹曉模糊
水上樓臺似畫圖
紅袖誰家乗小艇
捲簾看雪過鴛湖

雑言　明　王稚登

凍雲　寒樹　曉に模糊たり
水上の楼台　画図に似たり
紅袖　誰が家ぞ　小艇に乗じ
簾を捲き　雪を看て　鴛湖を過ぐ

【語釈】
○雑言…よもやまの事を詠った詩。○模糊…はっきりしないさま。ぼんやりしているさま。○紅袖…赤い袖で転じて美人。○鴛湖…浙江省嘉興の西南にある湖。湖中に煙雨楼がある。

★飲秋澗隠居夜帰値雪有作

明　陳鶴

秋澗の隠居に飲し　夜帰る　雪に値いて作有り

獨行長路儼如僧　　独り行く長路　儼として僧の如し
水滴簷牙半是冰　　水は簷牙より　滴り　半ば　是れ　氷る
歸到空園人已**静**　　空園に帰り到れば　人　已に静かに
雪花穿戸打殘燈　　雪花　戸を穿がち　残灯を打つ

【語釈】
○秋澗…姚淛。浙江省杭州の人。若くして学に優れ、鴻臚卿に任ぜられたが、すぐに辞職して隠棲した。○簷牙…軒の突き出た部分。○空園…人気の無い園。○殘燈…消えかかった灯。

★雪中訪嘉則於寶奎寺之樓店

明　徐渭

雪中　嘉則を宝奎寺の楼店に訪う

山徑尋君重復重　　山径　君を尋ね　重復た重
小樓百尺臥元龍　　小楼　百尺　元龍を臥さしむ
安窓偏向梅花角　　窓を安いて　偏に向う　梅花の角
去暎江天雪數峰　　去りて映ず　江天の　雪　数峰

【語釈】
○嘉則…沈明臣。浙江省鄞県の人，胡宗憲の幕僚となる。詩名有り。○寶奎寺…不祥。○樓店…楼房の店舗。○重復重…重なり合うさま。○元龍…道教用語で道を得た者。○江天…江と空。

十月

★和襲美初冬偶作

桐下空階疊綠錢
貂裘初綻擁高眠
小爐低幌還遮掩
酒滴清香似去年

襲美の初冬偶作に和す

唐　陸龜蒙

桐下の空階　綠錢を畳み
貂裘　初めて綻び　高眠を擁す
小炉　低幌　還た遮掩
酒滴の清香　去年に似たり

【語釈】

○襲美…皮日休。湖北省襄陽市の人太常博士、翰林學士となる。○空階…人気の無いきざはし。○綠錢…綠の苔。○貂裘…貂の皮でつくったかわごろも。○低幌…低い幌。○遮掩…覆い遮る。○酒滴…酒のしずく。

★南中感懷

南路蹉跎客未回
常嗟物候暗相催
四時不變江頭草
十月先開嶺上梅

南中感懷

唐　樊晃

南路　蹉跎として　客　未だ回らず
常に嗟す　物候の　暗に相催すを
四時　変せず　江頭の草
十月　先ず開く　嶺上の梅

【語釈】

○南中…南の地方。○蹉跎…生活が思うようにいかない。○物候…一年の季節。○四時…四季。○江頭…江のほとり。

★初冬

荷盡已無擎雨蓋
菊殘猶有傲霜枝
一年好景君須記
正是橙黄橘緑時

初冬

荷は尽きて 已に 雨を擎ぐる蓋無く
菊は残して 猶お 霜に傲る枝 有り
一年の好景 君 須らく記すべし
正に 是れ 橙黄橘緑の時

宋 蘇軾

【語釈】

○劉景文…名は季孫、景文は字。タングート族の西夏と戦った将軍劉平の子で、このとき、杭州で民兵を率いていた。○荷盡…蓮の葉がすっかり枯れてしまった。○擎…高く差し上げること。○蓋…かさ。○菊殘…菊が盛りを過ぎて咲き衰えたこと。○傲霜…霜に負けない。○須…すべからく～すべしと読み、当然～すべきである意。○橙…ユズ。○橘…ミカンの類。

（参考文献）　漢詩大系１７』

★小春花

天地無情正北風
飛鴻哀咽亂雲中
此時縱使開千樹
不及東皇一點紅

小春の花

天地 情無く 正に北風
飛鴻 哀咽す 乱雲の中
此の時 縱使 千樹を開くも
東皇 一点の紅に及ばず

宋 鄭思肖

【語釈】

○小春…小春日和。○飛鴻…空を飛ぶ雁。○哀咽…哀れに咽び鳴く。○東皇…春の神。

★十月　　十月　　元　善住

清霜欲重小春天　　清霜　重ならんと欲す　小春の天
楊柳蕭疏帯曉煙　　楊柳　蕭疏　曉煙を帯ぶ
無奈東皇苦多事　　奈ともする無し　東皇　苦だ　多事なるを
又傳春信到梅邊　　又　春信を伝えて　梅辺に到る

【語釈】
○小春…小春日和。○蕭疏…疎らで少ない。○曉煙…朝靄。○東皇…春をつかさどる神。○多事…することが多い。○春信…春の来た知らせ。

★立冬　　立冬　　明　王稚登

秋風吹盡舊庭柯　　秋風　吹き尽くす　旧庭の柯
黄葉丹楓客裏過　　黄葉　丹楓　客裏に過ぐ
一點禪燈半輪月　　一点の禅灯　半輪の月
今宵寒較昨宵多　　今宵の寒は　昨宵に較ぶれば　多し

【語釈】
○柯…木の枝。○丹楓…紅葉した楓。○客裏…旅の中。○禅灯…寺廟の灯火。

巻八　十一月

★冬至日獨遊吉祥寺　冬至の日独り吉祥寺に遊ぶ

宋　蘇軾

井底微陽回未回　井底の微陽　回るか　未だ回らざるか
蕭蕭寒雨濕枯荄　蕭々たる寒雨　枯荄を湿す
何人更似蘇夫子　何人か　更に　蘇夫子に似て
不是花時肯獨來　是れ　花時ならざるに　肯えて独り来る

【語釈】
○吉祥寺…江蘇省杭州市にあった寺。○井底…井戸の底。○微陽…微かな陽気。○蕭蕭…風雨等の物寂しい音の形容。○枯荄…枯れた草の根。○蘇夫子…蘇軾。
（参考文献）『漢詩大系　17』

★冬至後十餘日復至吉祥寺

宋　蘇軾

冬至の後十余日復び吉祥寺に至る

東君意淺著寒梅　東君　意浅し　寒梅を著くるに
千朶深紅未暇裁　千朶の深紅　未だ裁うるに　暇あらず
安得道人殷七七　安んぞ得ん　道人の殷七七
不論時節遣花開　時節を論ぜず　花を開かしむるを

【語釈】
○吉祥寺…江蘇省杭州市にあった寺。○東君…春を司る神。○千朶…多くの花を付けた枝。○深紅…赤い花。○道人…道教の師。○殷七七…道荃、祥という唐代の道教の師。9月にツツジの花を開く技を試したという。

★至節即事

天街曉色瑞煙濃
名紙相傳盡賀冬
繡幕家家渾不卷
呼盧笑語自從容

至節の即事　元馬臻

天街の曉色　瑞煙　濃く
名紙　相伝えて　尽く　冬を賀す
繡幕　家々　渾て卷かず
呼盧　笑語　自ら従容す

【語釈】

○至節…夏至又は冬至。この場合は冬至。冬至は一陽来復の日として祝われ、徹夜をする習慣があった。○即事…事に触れて、その場のことを題材にして作った詩。○天街…京城中の道路。○曉色…曉の景色。○瑞煙…めでたい霞。○名紙…名刺。○繡幕…刺繍をしたカーテン。○呼盧…博打のかけ声。

★至節即事

店舍喧譁徹夜開
熒煌燈火映樓臺
歡遊未曉不歸去
早有元宵氣象來

至節の即事　元馬臻

店舍の喧譁　夜を徹して開く
熒煌たる燈火　楼台に映ず
歡遊　未だ曉けざれば　帰り去らず
早く　元宵の気象の　来たる有り

【語釈】

○至節…夏至又は冬至。この場合は冬至。冬至は一陽来復の日として祝われ、徹夜をする習慣があった。○即事…事に触れて、その場のことを題材にして作った詩。○喧譁…かまびすしさ。○熒煌…光輝く。○歡遊…歓び遊ぶ人々。○元宵…正月十五日、上元節。この夜灯火をともして騒いだ。○氣象…景色。

★長安冬至

子月風光雪後看

長安の冬至　明　董其昌

子月の風光　雪後に看る

新陽一縷動長安　　新陽 一縷(いちる) 長安に動く
禁鍾乍應雲門曲　　禁鍾 乍(たちま)ち応ず 雲門の曲
宮樹先驅黍谷寒　　宮樹 先駆くる 黍谷(しょこく)の寒

【語釈】
○子月…旧暦１１月。○風光…風景。○新陽…初春。○一縷…わずか。○禁鍾…禁中の鐘。○雲門曲…周の六舞曲の一つ。○黍谷…北京市密雲県の西南にある山谷。

十二月

★除夜作　　除夜の作

唐　高適（こうせき）

旅館寒燈獨不眠　　旅館の寒灯　独り眠らず
客心何事轉悽然　　客心（かくしん）　何事ぞ　転（うた）た悽然（せいぜん）
故郷今夜思千里　　故郷　今夜　千里を思う
霜鬢明朝又一年　　霜鬢（そうびん）　明朝　又　一年

【語釈】

○寒灯…薄暗く、寒々とした灯。○客心…旅人の心。○何事…どうしたことか。○転…いよいよ。ますます。○悽然…物寂しいさま。痛ましいさま。○霜鬢…霜のような白い鬢。○又一年…一つ年をとる。

（参考文献）『漢詩鑑賞辞典』『唐詩選』

★除夜　　除夜

唐　白居易（はくきょい）

病眼少眠非守歳　　病眼　眠　少くして　歳を守るに非らず
老心多感又臨春　　老心　感　多くして　又　春に臨む
火銷燈盡天明後　　火は銷（しょう）し　灯は尽く　天明の後
便是平頭六十人　　便ち　是れ　平頭　六十の人

【語釈】

○守歳…除夜に眠らないでいる習慣。○天明…夜明け。○平頭…数のそろうこと。

★春近

閏後陽和臘裏回
濛濛小雨暗樓臺
柳條榆莢弄顔色
便恐入簾雙燕來

春近し　宋　黄庭堅

閏後　陽和　臘裏に回り
濛々たる小雨　楼台に暗し
柳條　榆莢　顔色を弄し
便ち恐る　簾に入りて　双燕の来ることを

【語釈】
○閏後…うるう月の後。○陽和…春天の暖気。○臘裏…陰暦十二月の中。○濛濛…煙るようにもやっとしているさま。○柳條…柳の枝。○榆莢…ニレの実。○雙燕…つがいの燕。

★春近

亭臺經雨壓塵沙
春近登臨意氣佳
更喜輕寒勒成雪
未春先放一城花

春近し　宋　黄庭堅

亭台　雨を経て　塵沙を圧す
春近く　登臨して　意気　佳なり
更に喜ぶ　軽寒　雪を成すを勒め
未だ　春ならざるに　先ず一城の花を放つを

【語釈】
○塵沙…砂塵。○登臨…高所に登って下を見渡すこと。○輕寒…微かな寒さ。○勒…統率して止める。

★春近

小雪晴沙不作泥
疏簾紅日弄朝暉
年華已伴梅梢晩
春色先從草際歸

春近し　宋　黄庭堅

小雪　晴沙　泥を作さず
疏簾　紅日　朝暉を弄す
年華　已に　梅梢に伴いて　晩れ
春色　先ず　草際従り帰る

【語釈】
○小雪…二十四節季の一つ、陽暦の十一月二十三日ころ。○晴沙…日光の照らす砂浜。○疏簾…粗く編んだすだれ。○紅日…赤い日の光。○朝暉…朝日。○年華…年。○梅梢…梅のこずえ。

★春近

梅英欲盡香無賴
草色才蘇緑未勻
苦竹空將歳寒節
又隨官柳到青春

春近し　宋　黄庭堅

梅英　尽きんと欲し　香　無賴なり
草色　才かに　蘇の緑　未だ勻かならず
苦竹　空しく　歳寒の節を将ちて
又　官柳に随いて　青春に到る

【語釈】
○梅英…梅花。○無賴…たよりない。○蘇…シソ科の一年草。○勻…ととのう。○苦竹…まだけ。○歳寒節…冬の季節。○官柳…公道に植えられた柳。

★臘月下旬偶作

歳暮烟霜澤國寒
曉鴉鳴處是柯山
地爐有火樽餘酒
自起焚香深掩關

臘月下旬の偶作

宋　張耒

歳暮　煙霜　沢国　寒し
暁鴉　鳴く処　是れ　柯山
地爐　火有りて　樽　酒を余す
自ずから　起きて　香を焚き　深く関を掩う

【語釈】

○臘月…陰暦十二月。○歳暮…年の暮。○烟霜…靄と霜。○澤國…水郷。○曉鴉…曉の鴉。○柯山…不確定。○地爐…地下に設けた暖炉。○掩關…門を閉ざす。

★歳晩書事

荒苔野蔓上籬笆
客至多疑不在家
病眼看人殊草草
隔林迢遞見梅花

歳晩に事を書す

宋　劉克莊

荒苔　野蔓　籬笆に上り
客　至りて　多く疑う　家に在らざるかと
病眼　人を看る　殊に草々
林を隔だてて　迢遞　梅花を見る

【語釈】

○歳晩…大晦日。○荒苔…荒れた苔。○野蔓…野生のつる草。○籬笆…竹、小枝などで作られた垣根。○草草…苦労するさま。○迢遞…遠くに。

★歳晩書事

細君炊秫婢繰絲
綵勝酥花總不知
窗下老儒衣露肘
挑燈自揀一年詩

歳晩に事を書す

宋　劉克莊（りゅうこくそう）

細君は秫（もちあわ）を炊き　婢は糸を繰る
綵勝（さいしょう）　酥花（そか）　総べて知らず
窓下の老儒　衣　肘を露（うるお）す
灯を挑（かか）げて　自ら揀（えら）ぶ　一年の詩

【語釈】

○歳晩…大晦日。○細君…妻。○綵勝…？○酥花…梅花。○老儒…年老いた学者。

★歳晩書事

門冷如冰儘不妨
由來富貴屬蒼蒼
誰能却學癡兒女
深夜潛燒祭竈香

歳晩に事を書す

宋　劉克莊（りゅうこくそう）

門は冷にして氷の如きなるも侭（み）な妨げず
由来　富貴　蒼々（そうそう）に属す
誰か能く却って痴兒女に学び
深夜　潜かに　祭竈香を焼く

【語釈】

○歳晩…大晦日。○儘…そのままにしておく。○由来…もともと。○蒼蒼…青い天。ここでは天の思し召し。○祭竈香…かまどを祀る香。

★歳晩書事

丐客鶉衣立戸前
豈知儂自窘殘年
染人酒媼逋猶緩
且送添丁上學錢

歳晩に事を書す

宋　劉克莊

丐客鶉衣　戸前に立つ
豈に知らんや　儂は自から残年を窘しむを
染人　酒媼の逋は　猶お緩かに
且く添丁を送り　学に上る銭

【語釈】

○歳晩…大晦日。○丐客…乞食。○鶉衣…破れ衣。○染人…染め物工。○酒媼…酒を売る老婆。○逋…租税を滞納する。○添丁…男の子。○上學…学問を修めるための金。

★土牛

刻木團泥作禍胎
驅牽不動蠢形骸
須臾齏粉渠休恨
教汝偷寒送暖來

土牛

明　郭登

木を刻し　泥を団して　禍胎を作す
駆牽　動かず　形骸を　蠢かす
須臾に齏粉　渠　恨むることを休めよ
汝をして寒を偷しみ暖を送り来らしむ

【語釈】

○土牛…粘土で作られた牛。陰の気を取り除くために、陰暦十二月に土製の牛が作られた。○禍胎…禍根。○驅牽…駆動したり牽いたりすること。○形骸…体。○齏粉…粉砕。

★十二月二十七日作　　十二月二十七日の作

明　吳孺子（ごじゅし）

三日半存何必戀　　三日半ば 存す 何ぞ必ずしも 恋わん
一年去盡不知留　　一年 去り尽きて 留むることを 知らず
春風只在虞山外　　春風 只だ在り 虞山（ぐざん）の外（ほか）
嫋嫋將來笑白頭　　嫋々（じょうじょう） 将（まさ）に来たりて 白頭を笑わんとす

【語釈】
○虞山…江蘇省蘇州市の虞山。○嫋嫋…しなやかで美しいさま。○將…「まさに～せんとす」と読み「今にも～しそうである」の意。○白頭…しらが頭。

附録　鴛鴦　鸂鶒

★除夕　　明　程嘉燧

久客懐人百事慵
春歸幾日是殘蹔
長安雪後無來往
報國門前獨看松

除夕

久客　人を懐いて　百事　慵し
春帰り　幾日　是れ　残蹔
長安　雪後　来往無し
報国門前　独り松を看る

【語釈】
○除夕…大晦日の夜。○久客…長く逗留する旅人。○春歸…春が過ぎ去る。○殘冬…冬の終わり。○來往…人の行き来。○報國門…長安の城門の一つ、不祥。

★鴛鴦　　唐　李商隱

雌去雄飛萬里天
雲羅滿眼淚潸然
不須長結風波願
鎖向金籠始兩全

雌去り　雄飛ぶ　万里の天
雲羅　眼に満ちて涙　潸然
須いず　長く　風波の願いを　結ぶことを
鎖して　金籠に向いて　始めて両全

【語釈】
○雲羅…網の目のように空に広がる雲。○潸然…涙が流れるさま。ハラハラ。○金籠…金の鳥籠。

★鸂鶒

錦羽相呼暮沙曲
波上雙聲戛哀玉
霞明川靜極望中
一時飛滅青山綠

鸂鶒（けいちょく）　唐　李羣玉（りぐんぎょく）

錦羽（きんう）　相呼ぶ　暮沙（ぼさ）の曲（くま）
波上の双声　哀玉（あいぎょく）を戛（かつ）す
霞明かに　川静かに　極望の中（うち）
一時に飛滅（ひめつ）し　青山　緑なり

【語釈】

○鸂鶒…オシドリに似た水鳥の一種。○錦羽…羽毛の美称。○暮沙…夕方の砂浜。○哀玉…翡翠の音のように悲惨な音。○戛…金石を叩いて音を出す。○極望…見渡す限り。○飛滅…飛び去って見えなくなること。

★鴛鴦

翠翹紅頸覆金衣
灘上雙雙去又歸
長短死生無兩處
可憐黃鵠愛分飛

鴛鴦（えんおう）　唐　吳融（ごゆう）

翠翹（すいあ）　紅頸（こうけい）　金衣（きんい）を覆（おお）う
灘上（たんじょう）　双々　去りて　又帰る
長短　死生　両処（りょうしょ）無し
憐（ぶん）むべし　黄鵠（こうこく）の　分飛（ぶんひ）を愛すを

【語釈】

○鴛鴦…おしどり。○翠翹…緑色の尾にある長い羽。○紅頸…赤い首。○金衣…金色の羽毛。○灘上…早瀬の上。○雙雙…つがいになって。○黃鵠…大鳥の名。黄色い羽をもつ。○分飛…雌雄別れて飛ぶ。

★鴛鴦

江島濛濛煙靄微
綠蕪深處刷毛衣
渡頭驚起一雙去
飛上文君舊錦機

鴛鴦

江島 濛々 煙靄 微なり
綠蕪 深き処 毛衣を刷う
渡頭 驚き起ちて 一双去り
飛び上る 文君が 旧錦機

唐　吉師老

【語釈】

○鴛鴦…おしどり。○江島…江の中の島。○濛濛…煙るようにぼおっとしているさま。○煙靄…霞と靄。○綠蕪…青々と茂っている雑草。○毛衣…羽毛。○渡頭…渡し場。○一双…ひとつがい。○文君…卓文君。司馬相如の妻。ウィキペディア。○錦機…錦織機。

★荆溪夜泊

點點漁燈照浪清
水烟疏碧月朧明
小灘驚起鴛鴦處
一隻採蓮船過聲

荆溪夜泊

点々たる漁灯 浪を照らして清し
水煙 疏碧にして 月朧 明かなり
小灘 鴛鴦を 驚き起たする処
一隻の 採蓮船の 過ぐる声

唐　李九齢

【語釈】

○荆溪…江蘇省常州市荆溪。○水煙…水面に立つもや。○疎碧…疎らな青緑色。○月朧…おぼろ月。○驚起…驚かせて飛び立たせる。○鴛鴦…おしどり。○採蓮船…蓮を採る船。

★鴛鴦

蘋洲花嶼接江湖
頭白成雙得自如
春晩有時描一對
日長消盡繡工夫

鴛鴦

蘋洲　花嶼　江湖に接す
頭白　双を成して自如を得たり
春晩　時有りて　一対を描く
日長くして　消尽す　繡工夫

宋　曹組

【語釈】
○鴛鴦…オシドリ。○蘋洲…浮き草が岸に生えている中洲。○花嶼…花の咲いている島。○成雙…つがいとなる。○自如…自若。○春晩…晩春。○消盡…使い果たす。○繡工夫…刺繍の苦労。

★題馬賁畫鸂鶒圖

雙眠雙浴水平溪
共看秋光卧兩堤
誰信瀟湘有孤鴈
冷沙寒葦不成棲

馬賁が画ける鸂鶒の図に題す

双眠　双浴　水　溪に平かなり
共に秋光を看て両堤に卧す
誰か信ぜん　瀟　湘に　孤鴈有りて
冷沙　寒葦　棲を成さざるを

金　党懐英

【語釈】
○馬賁…不祥。○鸂鶒…オシドリ。○双眠…つがいで眠る。○双浴…つがいで水浴びをする。○秋光…秋景色。○瀟湘…瀟水と湘水が合流する洞庭湖南の地方。○孤鴈…群れから離れた鴈。○冷沙…冷たい砂浜。○寒葦…寒々としたアシ。

★題宋徽宗雙鴛圖

蘆葉青青水滿塘
文鴛晴卧落花香
不因羌管驚飛起
三十六宮春夢長

宋の徽宗の双鴛の図に題す

明　汪廣洋

蘆葉青々として　水　塘に満つ
文鴛　晴に卧して　落花　香し
羌管の　驚飛し　起すに　因らず
三十六宮　春夢　長からん

【語釈】
○徽宗…北宋の第８代皇帝。芸術家としては優れていたが政治的には無能で、靖康の変に繋がった。○雙鴛…つがいのオシドリ。○蘆葉…アシの葉。○文鴛…オシドリ。○羌管…羌笛。異民族の笛。○三十六宮…多くの宮殿。

★小鴨

小鴨看從筆下生
幻法生機全得妙
自知力小畏滄波
睡起晴沙依晚照

小鴨

宋　黄庭堅

小鴨　筆下従り　生ずるを看る
幻法　生機　全く妙を得たり
自ずから　知る　力　小にして　滄波を畏るを
睡起して晴沙　晩照に依る

【語釈】
○小鴨…小さな鴨。○筆下…絵筆の下。○幻法…魔法。○生機…生理機能。○睡起…眠りから醒める。○晴沙…晴れた砂浜。○晩照…夕映え。

★春日

陰陰溪曲緑交加
小雨翻萍上淺沙
春色不堪流水送
雙浮鳴鴨趁桃花

春日　　宋　晁沖之

陰々たる溪曲　緑　交加す
小雨　萍を　翻して　浅沙に上る
春色　流水を送るに　堪えず
双つ浮ぶ　鳴鴨　桃花を趁う

【語釈】
○陰陰…木が茂って暗いさま。○溪曲…谷のくま。○交加…入り交じる。○萍…うきくさ。○淺沙…浅い砂浜。○鵝鴨…あひるとカモメ。○趁…追いかける。

★登浄遠亭

池冰受日未全開
旋旋波痕百皺來
野鴨被人驚得慣
作羣飛去却飛回

浄遠亭に登る　　宋　楊萬里

池氷　日を受け　未だ全くは開かず
旋々たる波痕　百皺　来たる
野鴨　人に驚か被れ慣れるを得て
群を作し　飛び去り　却って飛び回える

【語釈】
○浄遠亭…不祥。○池冰…池に張った氷。○開…解ける。○旋旋…やや、ゆったりしたさま。○百皺…多くのさざ波。○得慣…慣れることができた。

鳧鴨

★凍鳧　　明　貢性之

江天歳晩景淒淒
雲脚低垂望欲迷
水鳥畏寒飛不起
黄蘆枝上並頭棲

凍鳧　江天　歳晩　景　淒々
雲脚　低く垂れ　望　迷わんと欲す
水鳥　寒を畏れ　飛び起たず
黄蘆枝上　並頭して棲む

【語釈】
○凍鳧…凍えたケリ（小型の鴨）。○江天…江と天。○歳晩…年の暮れ。○淒淒…冷え冷えとしたさま。○雲脚…雲から垂れ下がった雨。○黄蘆…枯れて黄色くなったアシ。○並頭…頭を並べて。

★題梨花睡鴨圖　　唐　顧況

昔年家住太湖西
常過吳興畫溪
水閣筠簾春似海
梨花影裏睡鳧鷖

昔年　家は太湖の西に住す
常に過ぐ　呉興の　畫画溪
水閣　筠簾　春　海に似たり
梨花影裏　鳧鷖　睡る

【語釈】
○太湖…江蘇省蘇州市近くにある湖。○呉興…浙江省の県名。○畫画溪…不祥。○水閣…川に臨んだ閣。○筠簾…竹のすだれ。○鳧鷖…ケリ（小型の鴨）と鴨。